

＜配布資料リスト＞

● 1つ目のポケット

◆ プログラム

◆ 高等教育研究センターのあらまし/FDのご案内

● 2つ目のポケット（調査関係）

◆ 資料 No.1-1 信州大学の学生像—JCSS2012 から読み取れたもの—

◆ 資料 No.1-2 新入生調査 2013 年（JFS2013 信州大学）

◆ 資料 No.1-3 学習時間に関するアンケート

● 3つ目のポケット（学生相談関係）

◆ 資料 No.2-1 学生相談について

◆ 資料 No.2-2 出席確認システムについて

◆ 資料 No.2-3 GPA 制度について

◆ 資料 No.2-4 修学指導面談について

◆ 教職員のための学生サポート・ガイドブック（冊子）

◆ 快適なキャンパスライフのために（パンフレット）

● 4つ目のポケット（e-Learning 関係）

◆ e-Learning センターNewsletterNo.17

◆ 信州大学 e-Learning センター（パンフレット）

◆ 4月20日（木）新任教員向け eALPS 研修会について（通知）

● 5つ目のポケット

◆ 資料 No.3 『学位授与の方針』について

◆ 資料 No.4 信州大学のシラバスガイドラインについて

◆ 資料 No.5 国立大学法人信州大学教員業績評価・給与査定制度（全学教育機構基準）抜粋【平成 26 年度参考】

◆ 資料 No.6 FD 参加証書サンプル

◆ 高等教育研究センターNewsLetter

・ 信州大学の学生について（No.20）

・ GPA 制度導入に関する現段階でのご報告（No.21）

・ 信州大学の学生について（2）（No.24）

● 6つ目のポケット

◆ アンケート

平成26年度新任教員FD 2015/04/2

信州大学の学生像

－JCSS2012から読み取れたもの－

高等教育研究センター 李敏
limin@shinshu-u.ac.jp

1

このセクションの目的

1. 信州大学の学生を理解する。
2. 学生にどのような支援を必要としているのかを整理する。
3. 一教員として、効果的な支援を提供できるように準備する。

2

調査概要

- 大学生調査 (JCSS)

(JCIRP College Student Survey、略してJCSS)

⇒上級生を対象とする。

JCSS2012 ⇒ **今回ご紹介する内容**

JCSS2014

- 新入生調査 (JFS)

(JCIRP Freshman Survey、略してJFS)

⇒新入生を対象とする。

JFS2013

その他の調査：学習時間調査、授業アンケート（毎年）

卒業生調査（2014年）等々

3

調査概要

1. 調査期間 2012年11月

2. 調査対象の属性

1) 有効回答数： 1,344 そのうち：**4年生**
1,284(96%)

2) 各学部の回答数：

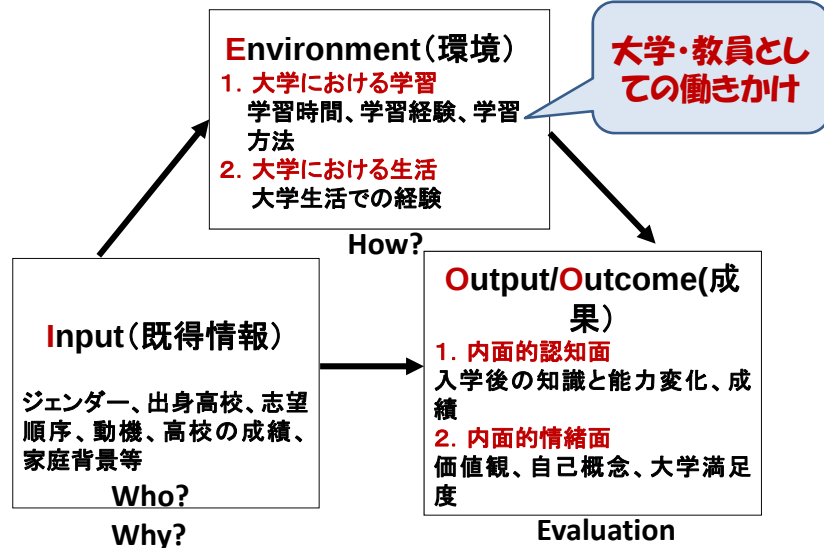
人文学部	26	教育学部	204	経済学部	89
理学部	96	医学科	104	保健学科	37
工学部	421	繊維学部	228	農学部	138

⇒ **4年間の大学生生活の振り返り**

4

分析枠組

I-E-Oモデル



Astin, A.W.(1993). *Assessment for Excellence: The Philosophy and Practice of Assessment and Evaluation in Higher Education*, Phoenix, Arizona: ORYX Press. P.18 5

いかに学生の学習効果をあげるか。

E（環境）：学生が教育課程のなかで経験すること

・大学の組織的特徴：

大学特性、**アドミッション・ポリシー**、**カリキュラム・ポリシー**、**ディプロマ・ポリシー**、専門分野等

・学生関与（学びの実態）：

個人の努力： 学習時間の保証、学習習慣の定着

教職員支援： 学修支援（GPA、履修相談、キャリア支援、心のケア、ライティングセンター等々）

学生同士の関係： 学生によるピアサポート

⇒ 学生個々の差異があるにせよ、**大学における教育**を経て**成果**につながる。

Input (Who?)

家庭背景

項 目	全 学	各学部
保護者の学歴:短大・大卒・大卒以上	父親57%(46%) 母親48%(40%)	医: 父親73% 母親70%
奨学金の受給率(授業料免除も含む)	50% その内(2種受給:5.4%、3種類受給:0.6%)	

信大生の保護者の学歴が比較的に高い。

注:()の数値は他大学を含む全調査大学の平均値(以下同)

7

Input (Who?)

出身高校

項 目	全 学	各学部
出身高校:公立高校	79%	医:私立 45%
高校の成績:「中の上」と「上位」	45%	医:56%

公立高校の出身者が8割近く占めている。
比較的に学力の高い学生が進学している。

8

Input (Who?)

背景志望

項 目	全 学	各学部
第一志望で進学した学生 (不本意進学した学生)	56%(53%) 44%(47%)	農:69%、経:66% 保:62%
自分の大学生生活が充実している	88%	教:93% 農、保:92% 医:91%、織:90%
もう一度選び直せるとしても信州大学に入学する	45%	農:54% 教:52%

- 実は、高卒の時点で、明確な進路展望を持っている学生は少ない。
- 大学生活に対する評価はかなり高い。

9

Input (Why?)

進学動機・全学

- 本学の合格可能性が高かった 79% ①
- 入試科目が自分に合っていた 72% ②
- 大卒の学歴を得ることができる 69% ③
- 学生生活を楽しんでみたかった 68% ④
- ひとり暮らしができる 57% ⑤
- 学費が適当であった 61% ⑥
- 本学で学ぶ内容に興味があった 59% ⑦

10

Input (Why?)

進学動機・全学

- ①入試の策略 学力相当の大学
- ②大学の学歴の社会的効用に注目する
- ③大学生活への憧れ
- ④国立だから
- ⑤信州大学だから

⇒ **学力、家庭の経済状況が進学行動に強く影響する。**

11

Input (Why?進学動機・各学部)

- 人：「学生生活を楽しんでみたかった」 92%
- 「本学で学ぶ内容に興味があった」 81%
- 教：「資格を取ることができる」 42%
- 経：「親の希望」 51%
- 「高校の先生に勧められた」 51%
- 理：「入試科目が自分にあっていた」 52%
- 医：「資格を取ることができる」 77%
- 保：「資格を取ることができる」 95%
- 工：「大卒の学歴を得ることができる」 77%
- 農：「本学で学ぶ内容に興味があった」 87%
- 織：「本学で学ぶ内容に興味があった」 78%
- 「卒業生の就職がよい」 65%
- 「研究に対する評価が高い」 61%

12

Input (Who?)

通学状況

項 目	全 学	各学部
自宅外通学	88%(60%)	経済学部:78%
片道通学時間30分未満	91%(61%)	経済学部:85%

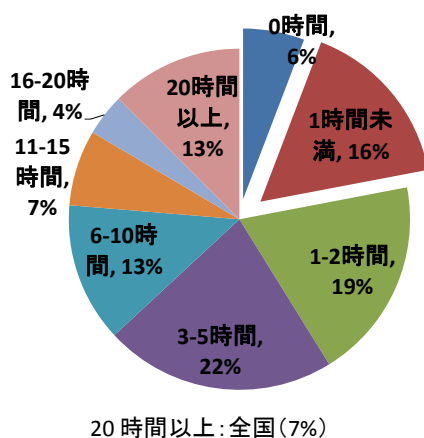
**大学の近辺に下宿するケースが多いことは、
本調査に参加した他大学と比べて特徴的ところである。**

13

大学における学習

学 習

・ 授業外学習時間（1週間）



- ・ 勉強している学生と勉強しない学生の**二極分化**
- ・ ただし、学部によって、授業、実験の時間が長いために、授業外学習時間を圧迫してしまうこともある。例えば、医学科)

14

学 習

・授業外学習時間の影響要因

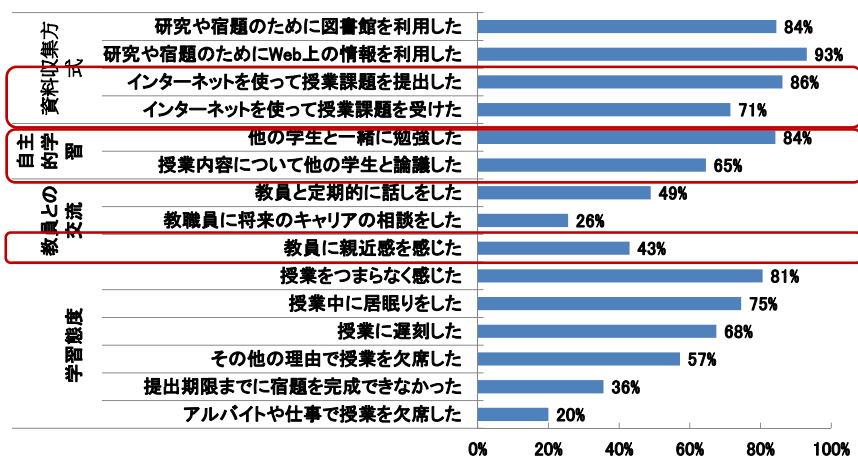
- ① 読書時間の長い学生は授業外学習時間が長い。
- ② 部活動やアルバイトなどの課外活動は、学生の授業外の学習時間を圧迫しない。

⇒適切な課外活動は、視野の拡大ややる気の向上などに積極的な効果を持っている。

大学で授業外学習時間の長い学生は、大学での成績が良い。

15

学習方法



16

大学における学習

学 習

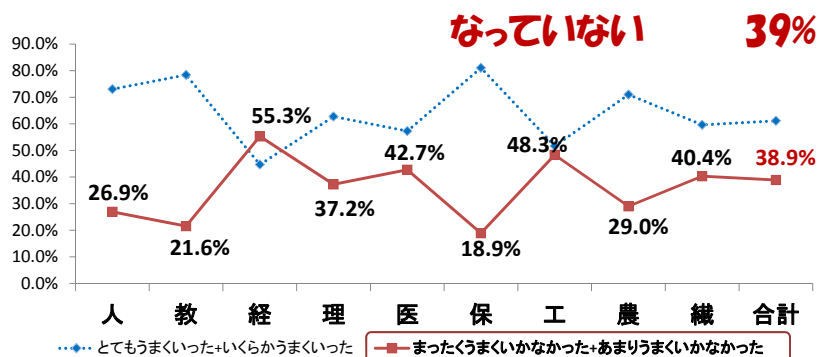
- ・ インターネットを利用して勉強する。
- ・ 自主的学習を友人とともに勉強する。
- ・ 教員との交流は本調査参加の他大学と比べ、多いものの、教員に親近感を感じた学生は43%にとどまっている。

17

大学における生活

大学生活への適応

- ・ 他の学生と友情を深める 84%
- ・ 大学教員と顔見知りになる 61%



入学してから、大学教員と顔見知りになったのか

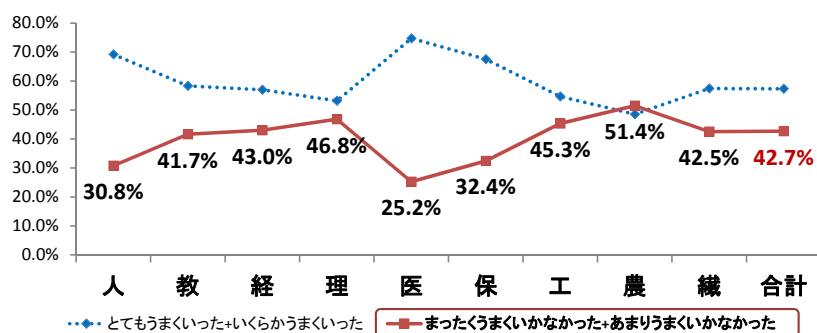
18

- 教員が日々の教育の中で学生との接触を増やしたり、学生を個人として知ることが求められる。

19

大学における生活

大学生活への適応



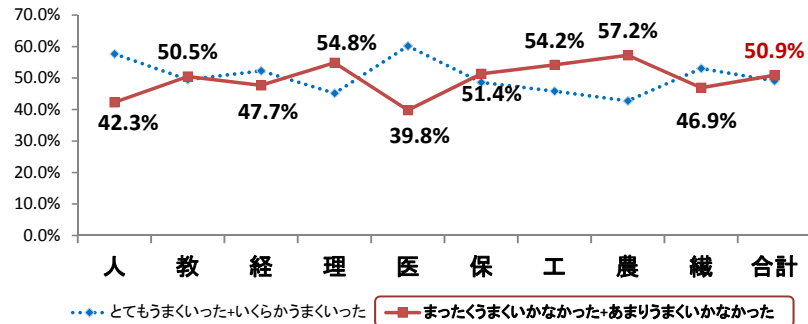
効果的に学習する技能の習得

「まったくうまくいかなかった+あまりうまくいかなかった」
全学 43%

20

大学における生活

大学生活への適応



時間を効果的に使う

「まったくうまくいかなかった+あまりうまくいかなかった」

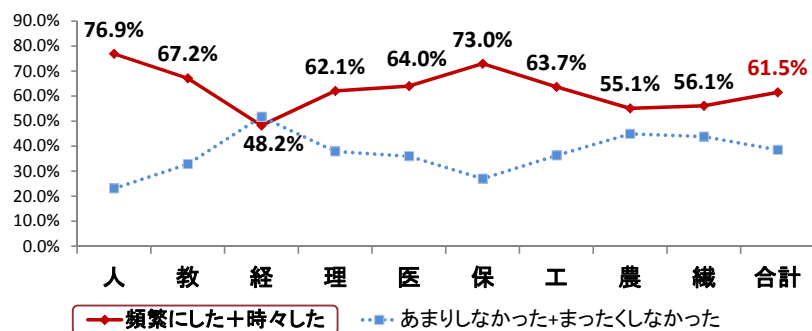
全学: 51%

⇒ 1年次の時に、学習技能に関する指導が不可欠である。

21

大学における生活

大学生活への適応



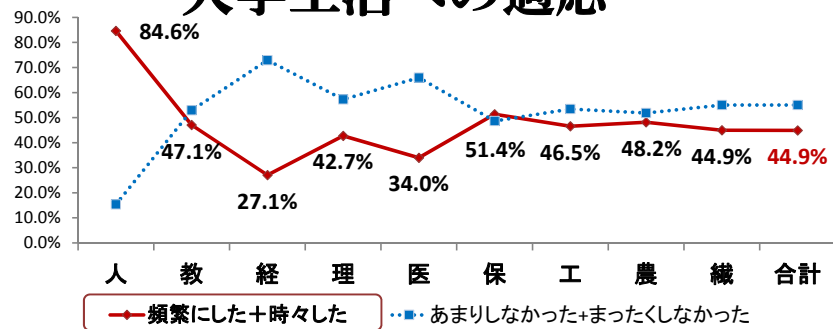
やるべきことの多さに圧倒された

「頻繁にした+時々した」 全学: 62%

22

大学における生活

大学生活への適応



ゆううつで、落ち込んだ

「頻繁にした+時々した」 全学： 45%

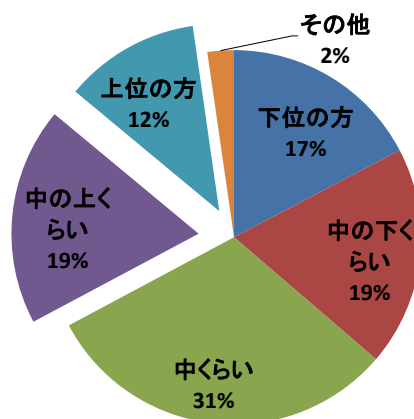
⇒保健センターのような専門機関によるカウンセリング以外に、日々の学修支援、学生指導の際にも、学生に対する心理的ケアも必要である。

23

Outcome

学習成績

・ 本学での成績



上+中の上 3/1
中 3/1
下+中の下 3/1

24

Outcome

学習成績

• 成績不振の学生の特徴

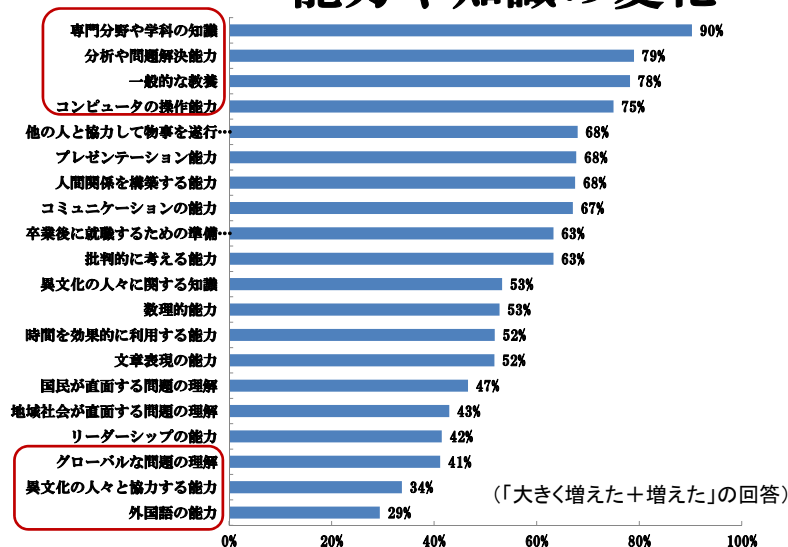
(在学中の成績：中の下+下位)

- 高校成績が下位の学生
- 不本意入学の学生
- 他の学生との交流、共同学習経験の少ない学生
- 授業後、勉強しない学生（授業外学習時間の短い学生）
- 奨学金をもらっていない学生（奨学金をもらっている学生が勉学に励んでいる。）

25

Outcome

能力や知識の変化



入学時と比べて、能力や知識の変化

26

Outcome

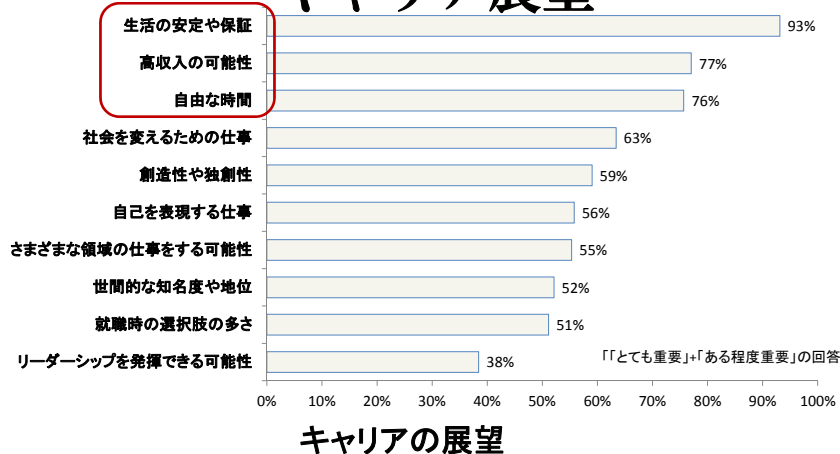
能力や知識の変化

- **増えた**：専門知識、教養知識、分析や問題解決能力、コンピュータの操作能力
- **増えていなかった**：外国語能力、異文化の人々との交流能力、グローバルな問題の理解

27

Output

キャリア展望



生活を大切にする学生の特徴が見られる。

28

Output

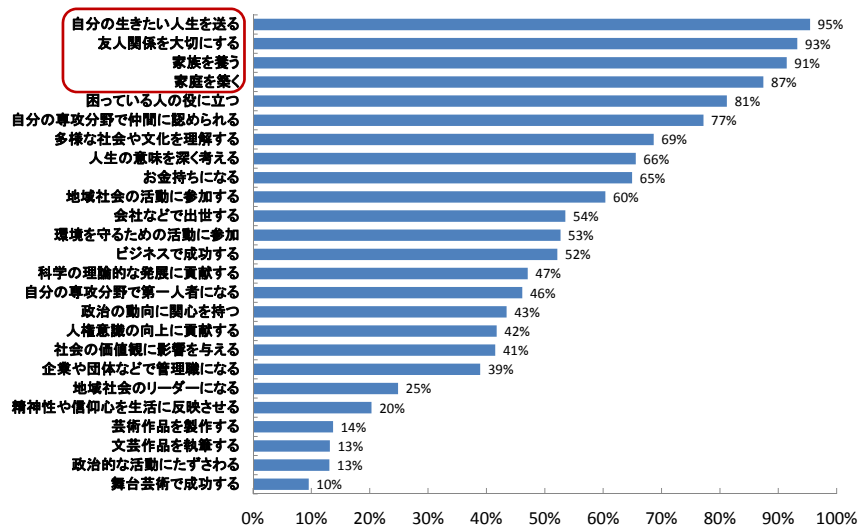
キャリア展望

- ・ **人**：「安定志向」、「自由な時間」
- ・ **教**：「就職時の選択肢の多さ」を重視しない
- ・ **経**：「世間的な知名度や地位」
- ・ **理**：平均的
- ・ **医**：「高収入」
- ・ **保**：「高収入」、「出世」より、「自分の生活」、「友人」を大事にする。
- ・ **工**：「高収入」、「知名度や地位」
- ・ **農**：「高収入」、「知名度」、「出世」のことを重視する割合が平均より低い。 ⇒ 淡泊的？
- ・ **繊**：「高収入」、「生活の安定や保証」、「創造性や独創性」、「就職時の選択肢の多さ」

29

Output

価値観



30

Output

価値観

- **人**：「自分らしい人生」、「家族・友人」
- **教**：「出世」と「金銭」よりは、「困っている人の役に立つ」、「人生の意味を深く考える」、「地域社会の活動に参加する」、「友人関係を大切にする」、「自分の生きたい人生を送る」
- **経**：「管理職になる」、「会社などで出世する」、「お金持ちになる」、「ビジネスで成功する」
- **理**：「科学の理論的な発展に貢献する」。
「家族を養う」と「家族を築く」平均より低い

31

Output

価値観

- **医**：「自分の専門分野で第一人者になる」
「科学の理論的な発展に貢献する」
- **保**：「高収入」、「出世」より、「自分の生活」、「友人」を大事にする。
- **工**：「管理職になる」、「会社などで出世する」、「お金持ちになる」、「ビジネスで成功する」、「科学の理論的な発展に貢献する」
- **農**：「環境を守るための活動に参加する」、「多様な社会や文化を理解する」
- **織**：「管理職になる」、「会社などで出世する」、「お金持ちになる」、「ビジネスで成功する」、「科学の理論的な発展に貢献する」

32

まとめ

- 信州大学の学生の強さと弱さは何か。
- あなたが所属する学部の学生にはどのような特徴があるか。

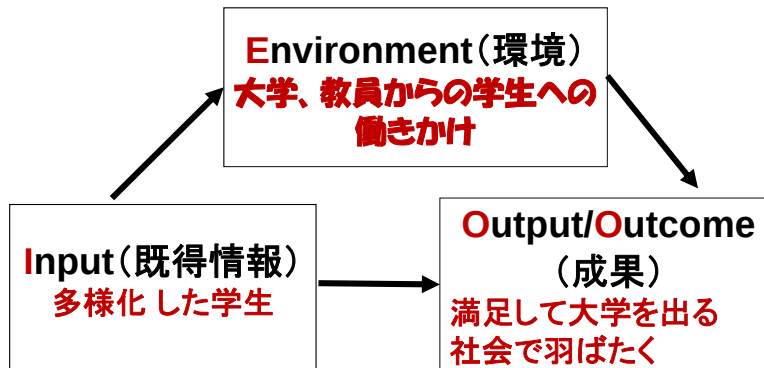
33

まとめ

- **合格の可能性**及び**家庭の経済力**が信大進学の主な基準となっており、大学・学部への愛着が入学してからのこととなっている。
- 進学してからは大学生活に対する満足度が高い。
- **学習方法の習得**及び**学習習慣の養成**が課題である。
- キャリアに関しては、**自分の生活を大事にする**傾向がある。

34

まとめ



35

まとめ（提言）

- 学習習慣と学習時間は学生の成績、ひいては大学卒業後のキャリアアップに大きく影響するため、学生の**学習習慣を定着させる**ことが重要である。
- **大学生としての生活(学習方法、心のケア)**を**教員が学生との接触を増やす**ことで、教員との人間関係の中で伝えていくことが望まれる。

36

ご静聴、どうもありがとうございました。

コメントとご質問は
limin@shinshu-u.ac.jpへどうぞ！

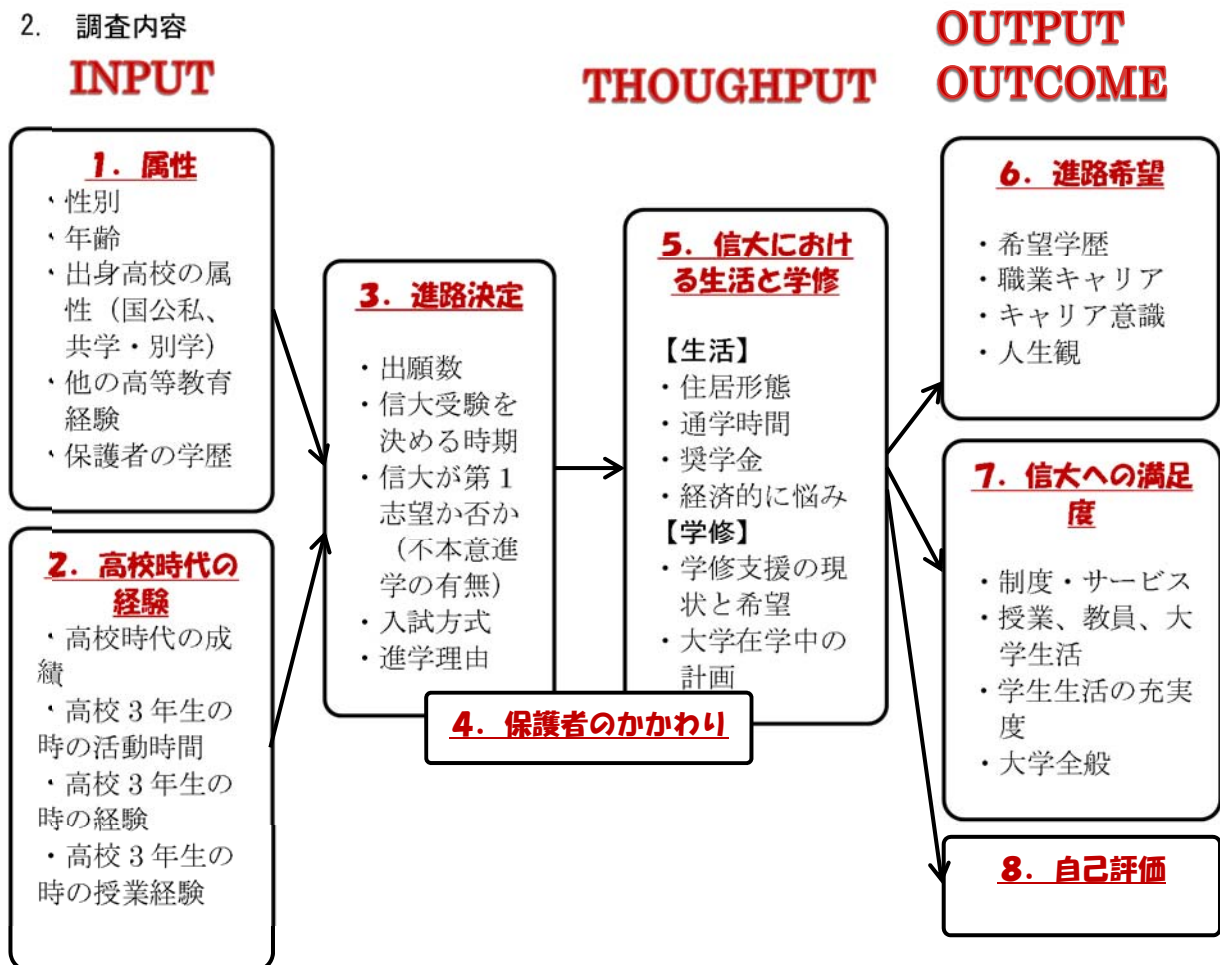
37

新入生調査 2013 年 (JFS2013 信州大学)

【調査概要】

1. 調査期間 2013 年 7 月

2. 調査内容



3. 分析内容

1) 不本意進学者について

高校の時の成績、受験と進学の特徴（願書の提出数）、本学の受験を決める時期、今後の計画、大学への評価

2) 学修支援を受けている人と受けた人

高校の時の成績、大学への評価、満足度

3) 「共通教育あるいは教養教育の授業」の評価と学修支援との関係

4. 回答率

表 1 回答者数と回答率

	回答者数	一年生数	回答率
人文学部	69	175	39%
教育学部	276	286	97%
経済学部	119	191	62%
理学部	157	212	74%
医学科	120	127	94%
保健学科	118	157	75%
工学部	459	482	95%
農学部	169	182	93%
繊維学部	223	281	79%
無回答			48
合計	1,758	2,093	84%

調査結果の概要

1. **属性**：新入生の多くは公立高校から進学した比較的学力の高い学生である。保護者の半数以上は大学卒の学歴を持っている。
2. **高校時代の経験**：新入生の 56%は高校での成績が「上位の方」と「中の上」という比較的に優秀な学生である。半数以上の新入生は高校 3 年生の時に一週間あたり 16 時間以上勉強していた。また、多くの学生はストレス、ゆううつなどの経験をもっていた。このことは 4 年生調査の中でも確認された。学生の心のケアにより力を入れる必要がある。
3. **進路決定**：専門職志向の強い教育学部、医学科、保健学科の学生は入学願書の提出数が少ない。信大の受験を決めた時期について、人文系と農学部の学生は決定時期が早いのに対し、理工系の学生は信大の受験を決めたのがセンター試験後という遅い時期である。信大に進学した理由は、「学力相当」を挙げた学生が多い。「本学で学ぶ内容に興味があった」、「資格をとる」ことも学生を引き付ける大きな要因である。
4. **保護者の関わり**：保護者は大学での事務的な手続きに大きく関わっている（86%）。保護者向けの説明会を開催する必要性が高い。
5. **信大における生活と学修**：9 割程度の学生が大学の近辺に下宿している。3 分の 1 の新入生が、返済義務のある奨学金を受給している。半数以上の学生は「学費の支払い」に不安を感じている（中に「とても不安」と回答した者は 11%に達している）。したがって、経済的支援をさらに充実する必要がある。
新入生の 17%が学修補助や補習授業を受けている。そのほか 42%の学生は学修補助や補習授業を希望している。希望者は高校の時の成績が上位から下位まで広い範囲に存在する。リメディア教育のニーズの高さが読み取れる。「数学」、「理学」、「英語」と比べ、「文章表現」に対する学修補助の必要性が往々にして見落とされがちであるが、実際 25%の新入生が補助を希望している。レポート、論文の書き方の訓練に対するニーズが高いことが推測される。不本意進学の学生の中に、専攻分野の変更、転学・編入を考える者が多い。その中には、教育学部の学生の中に、第 1 志望で進学した学生が多いものの、キャリア・専攻分野を考える人がかなりいる。その原因を検討する必要がある。また、より柔軟な編入制度の整備も視野に入れる必要がある。
6. **進路希望**：人文系は学部まで、理工系は大学院までという学歴希望の特徴がみられる。ただし、人文学部の 21%、教育学部の 16%が大学院の進学を希望している。大学進学
の時点で、学生の進路希望に応じるキャリア教育の実施が望ましい。
7. **信大への満足度**：信大生は大学の教育に対する満足度が高い。一方、「教員と話をする機会」、「履修や成績に対するアドバイス」、「個人別の学習指導や援助」などのような教員と学生との個人ベースの交流、あるいはアドバイスを求める機会の少なさにやや不満を持っている結果が読み取れる。4 年生調査の中でも、同じ結果が確認された。学生が大学における学習と生活を効率的に計画するため、学習、履修、成績に対するアドバスの体制を強化する必要がある。また、教員が日々の教育の中で学生との接触を増やしたり、学生を個人として知ることが求められる。

1. 属性

1.1. 性別 (Q1)

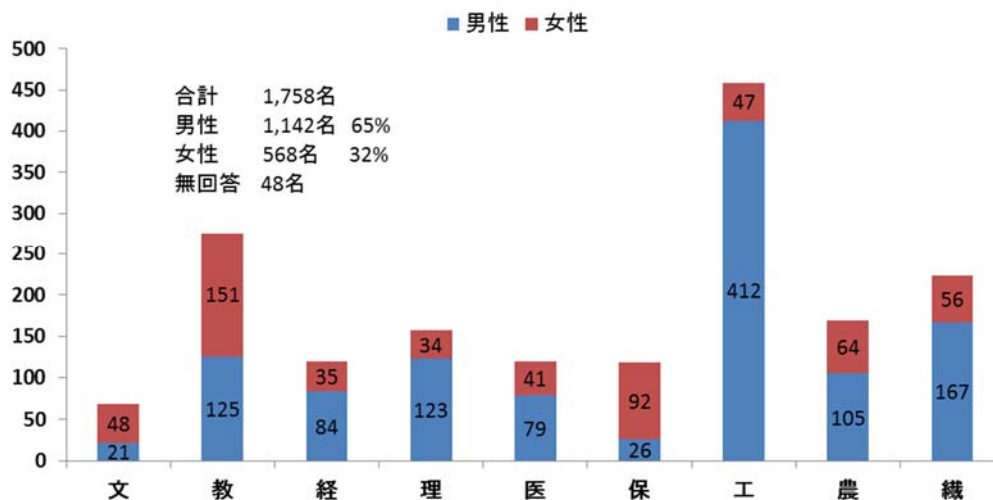


図 1 回答者の性別分布

1.2. 年齢 (Q2)

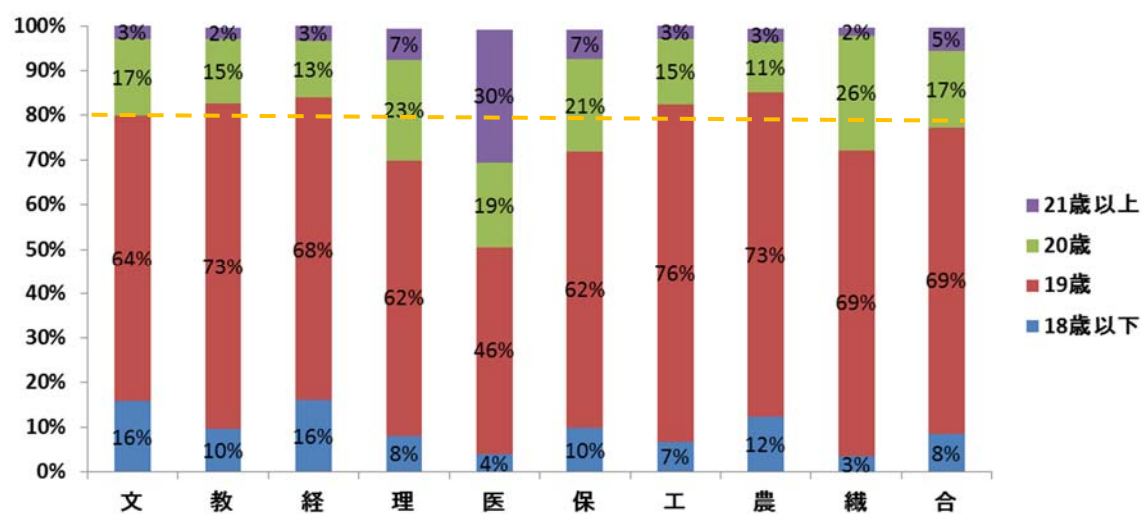


図 2 年齢分布

人文学部、教育学部、経済学部、工学部、農学部は8割以上の新入生は調査時点で19歳となっている。現役で進学した学生が大多数を占めていることを物語っている。一方、医学科の一年生は20歳以上の学生が49%を超えており、年齢層がやや高い。

1.3. 出身高校の属性（国公私、共学・別学）（Q7）

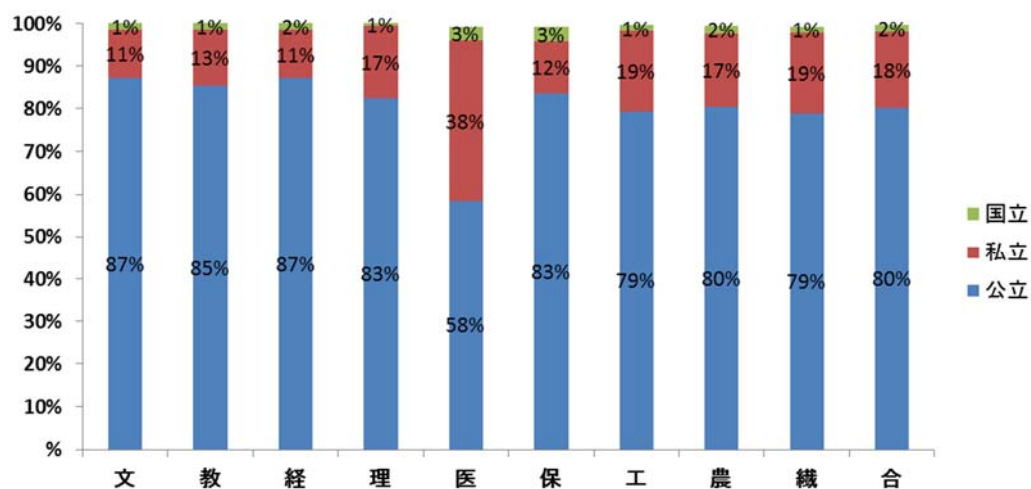


図 3 出身高校の属性

新入生の 8 割は公立高校の出身である。医学科の新入生の 4 割近く（38%）が私立高校から進学した。人文系と比べ、理工系の学部の新入生の中に、私立高校の出身者がやや多い。

出身高校を共学・別学別でみれば、信大の 91%の新入生が共学高校の出身であるが、医学科の新入生の 26%、理学部の新入生の 12%が別学高校の出身者である。（図表省略）。

新入生の中に 4%の学生は本学以外の高等教育機関に進学した経験を持っている。医学科の新入生の中に 25 名（20%）が他大学に進学した経験を持っている。これが医学科の新入生の年齢層がやや高くなった一因であろう。

1.4. 保護者の学歴（Q32-2）

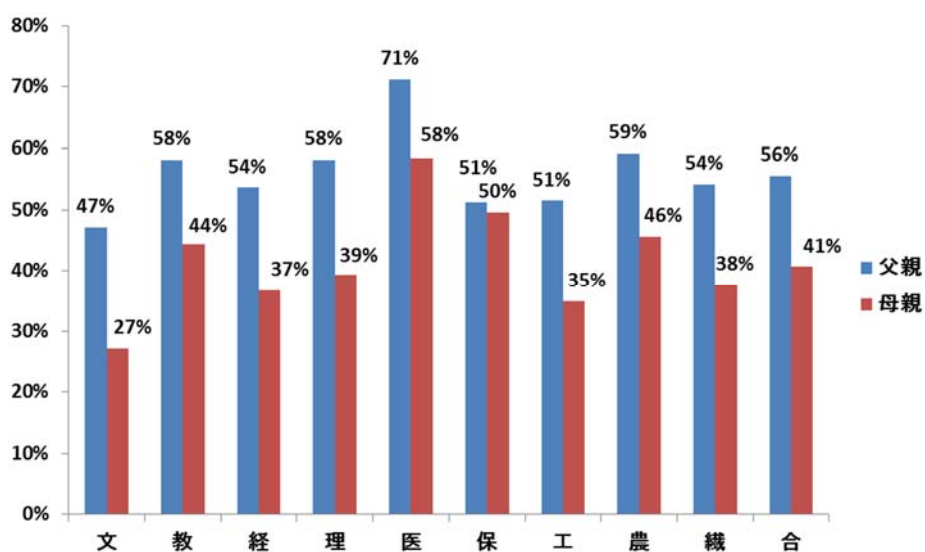


図 4 保護者の学歴（大卒以上）

新入生の父親の 56%、母親の 41%は大卒以上の学歴を持っている。中には医学科の学生の保護者の学歴が特に高い（父親 71%、母親 58%）。それに対して、人文学部の学生の親の学歴は全学平均をやや下回る（父親 47%、母親 27%）。

2. 高校時代の経験

2.1. 高校時代の成績（Q6）

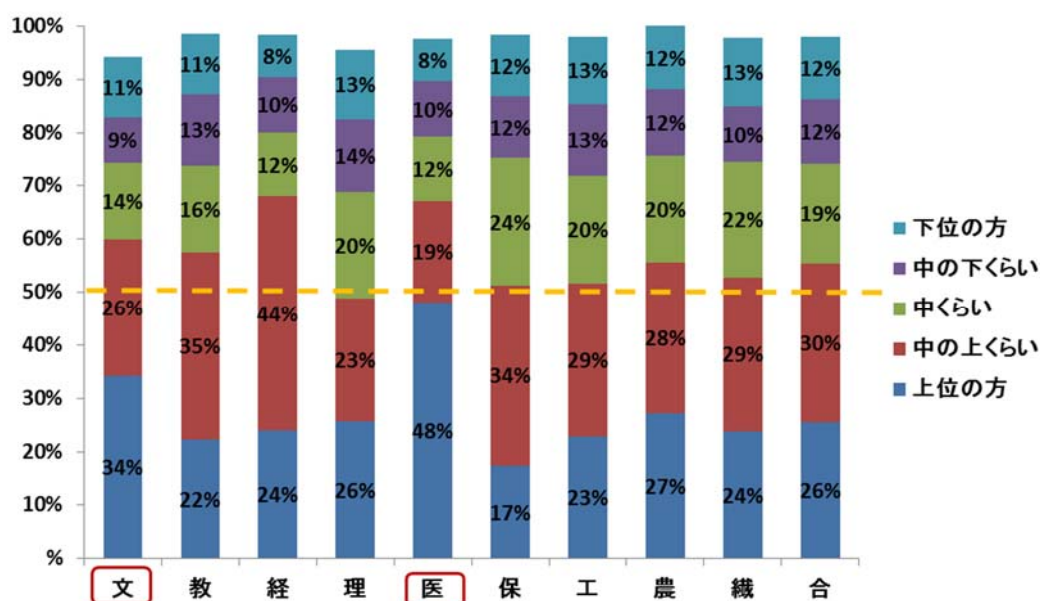


図 5 高校での成績

新入生の 56%は高校での成績が「上位の方」と「中の上」という比較的に優秀な学生である。中には、医学系の新入生の半数近く（48%）、人文学部の新入生の 34%は高校での成績が「上位」である。

2.2. 高校 3 年生の時の活動時間（一週間あたり）（Q21）

高校 3 年生だった時、今の新入生の半数近く（49%）は一週間あたり「勉強や宿題」に費やした時間は 16 時間以上を超えていた。勉強に励んでいることが読み取れる。一方、勉強時間が 1 時間未満の学生は 6%いる。「テレビ鑑賞」、「ゲーム遊び」の時間が 16 時間を超えた学生はそれぞれ 6%と 5%に達していた。

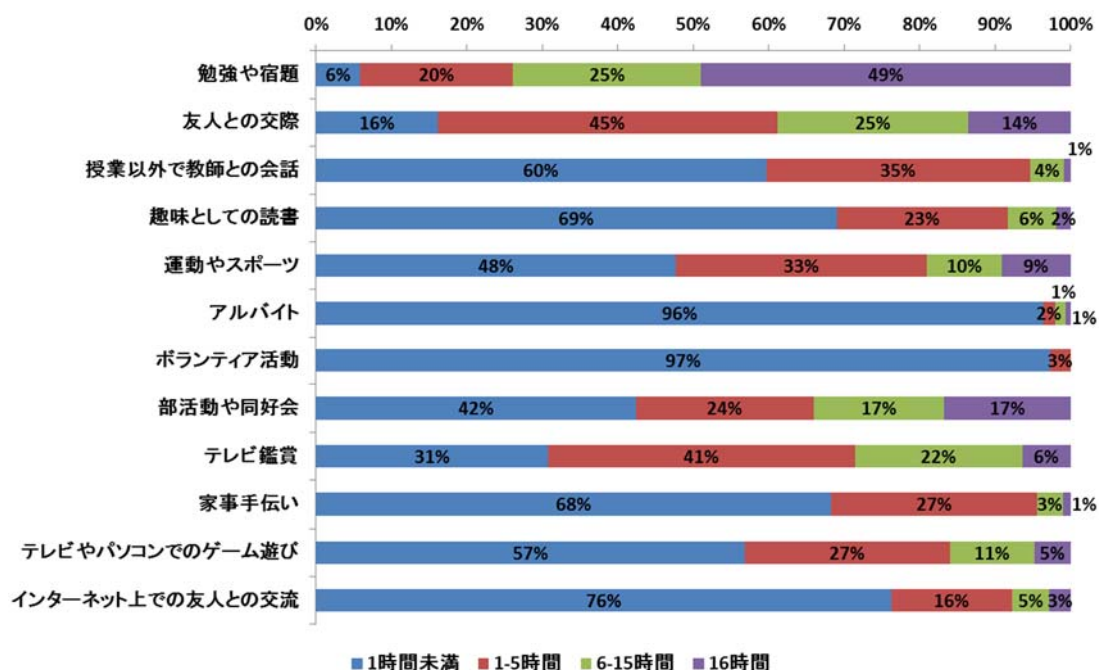


図 6 高校 3 年生の時の活動時間

2. 3. 高校 3 年生の時の経験 (Q22)

表 2 高校 3 年生の時の経験

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
やるべきことの多さに圧倒された	61%	60%	44%	51%	54%	68%	55%	63%	56%	57%
ゆううつで、落ち込んだ	53%	33%	31%	34%	46%	57%	28%	40%	37%	36%
授業に遅刻した	20%	20%	15%	19%	25%	15%	20%	15%	16%	18%
政治について討論した	17%	9%	17%	13%	16%	7%	7%	9%	10%	10%
ボランティア活動を行った	3%	11%	8%	10%	7%	8%	5%	10%	5%	7%
礼拝や宗教的な活動に参加した	6%	4%	6%	8%	12%	7%	6%	10%	7%	7%
留学生と交流した	6%	11%	9%	8%	3%	10%	4%	8%	5%	7%
宗教について討論した	6%	3%	6%	8%	7%	3%	4%	8%	4%	5%
アルコール飲料を飲んだ	1%	4%	6%	6%	8%	5%	4%	4%	4%	4%
個人的にカウンセリングを求めた	0%	5%	4%	4%	6%	10%	1%	1%	3%	4%
喫煙した	0%	0%	0%	1%	4%	2%	1%	1%	0%	1%
政治的な活動に参加した	0%	0%	0%	1%	2%	3%	1%	1%	0%	1%

高校 3 年生の時の経験をみると、「やるべきことの多さに圧倒された」こと (57%) と「ゆううつで、落ち込んだ」こと (36%) がもっとも多かった。大学受験という大きなプレッシャーを抱えているためだと推測される。女子学生の中に、このようなマイナスな経験を持っている割合が男子学生より圧倒的に多い。 (「やるべきことの多さに圧倒された」：男性 51% で、女性 69% ; 「ゆううつで、落ち込んだ」：男性 29%、女性 51%、表省略)。女子学生数が多い人文学部、教育学部、保健学科にこのようなマイナスな経験を持っている学生が際立って多い。

しかし、大学進学 of 重圧から解放されたとはいえ、大学期間中「やるべきことの多さに圧倒された」、「ゆううつで落ち込んだ」学生の割合は落ちるどころか、上昇した傾向さえ

あることが4年次の調査のなかで確認された（大学生調査2012、61%、45%）。もちろん、調査対象者が異なるため、信大在学中にプレッシャーが増加したという結論が下せないが、学生の心の問題により注目する必要がある。

3. 進路決定

3.1. 入学願書の提出数（Q10-1、本学と他大学を含めて、入学願書を提出した学部数）

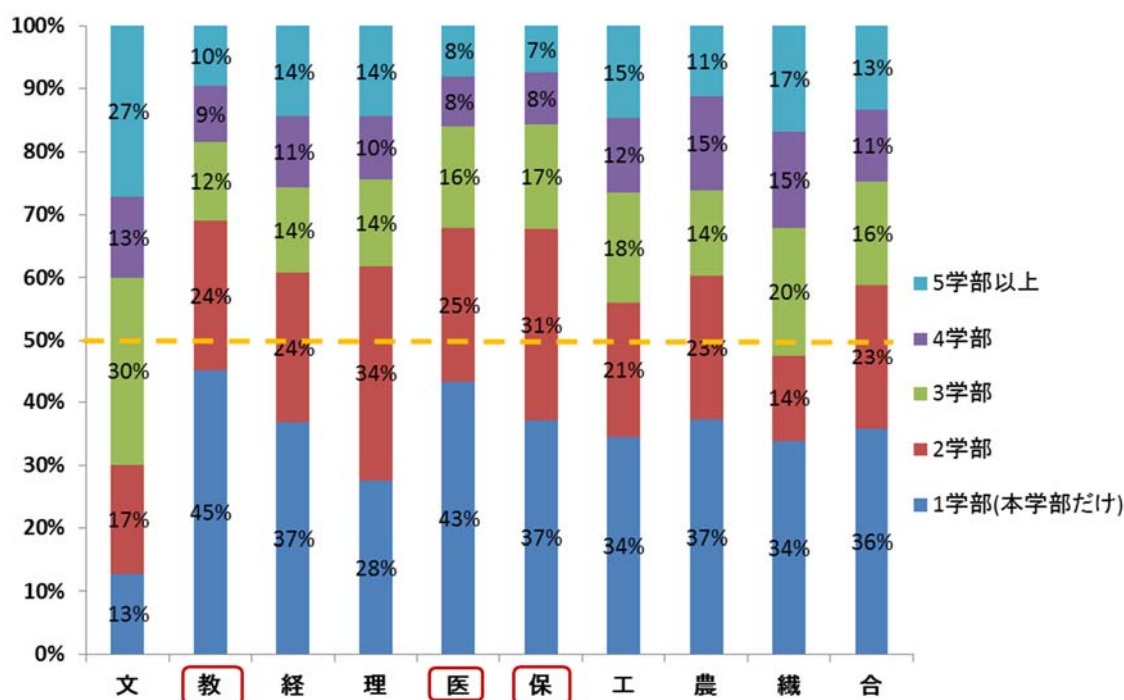


図 7 入学願書の提出数

新入生が本学部のみ（1学部）に入学願書を提出した割合は教育学部が45%、医学科が43%となっている。保健学科の新入生は「1学部+2学部」の割合が68%に達している。専門職志向が強いこの3つの学部と学科の学生は大学進学前にすでに明確な進路希望を持っていることが読み取れる。

一方、人文学部の新入生には多数の学部を併願する特徴がある。

3.2. 本学の受験を決めた時期（Q14）

表 3 本学の受験を決めた時期

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
高校入学以前	1%	8%	5%	3%	4%	2%	2%	3%	%	3%
高校1年生	6%	11%	2%	3%	4%	4%	3%	5%	2%	4%
高校2年生	16%	12%	13%	8%	9%	6%	7%	12%	7%	9%
高校3年生（4月～8月）	10%	20%	21%	16%	6%	23%	17%	29%	19%	18%
高校3年生（9月～1月中）	23%	13%	16%	16%	12%	13%	19%	13%	16%	16%
大学入試センター試験終了後	37%	28%	31%	36%	32%	36%	39%	28%	40%	35%
浪人生時代	7%	8%	11%	19%	34%	13%	12%	10%	15%	14%
合計	70	282	125	160	125	121	470	169	231	1758

全体から言えば、本学の受験を決めた時期のピークは大学入試センター試験終了後となっている。人文学部、教育学部、経済学部、農学部の学生はセンター試験前に本学の受験を決めた学生が多い。特に教育学部の新入生の 30% は高校 2 年前にすでに本学の受験を決めたという「早期進路決定型」の学生が多い。それに対して、理学部、医学科、工学部、繊維学部の新入生はセンター試験後ようやく本学の受験を決断した学生が数多くいる。中に医学科の新入生の 34% は信大の受験を決めたのは浪人時代である。進路決定の時期に合わせて、戦略的に大学説明会を開催することが考えられる。

3.3. 不本意入学（Q12）

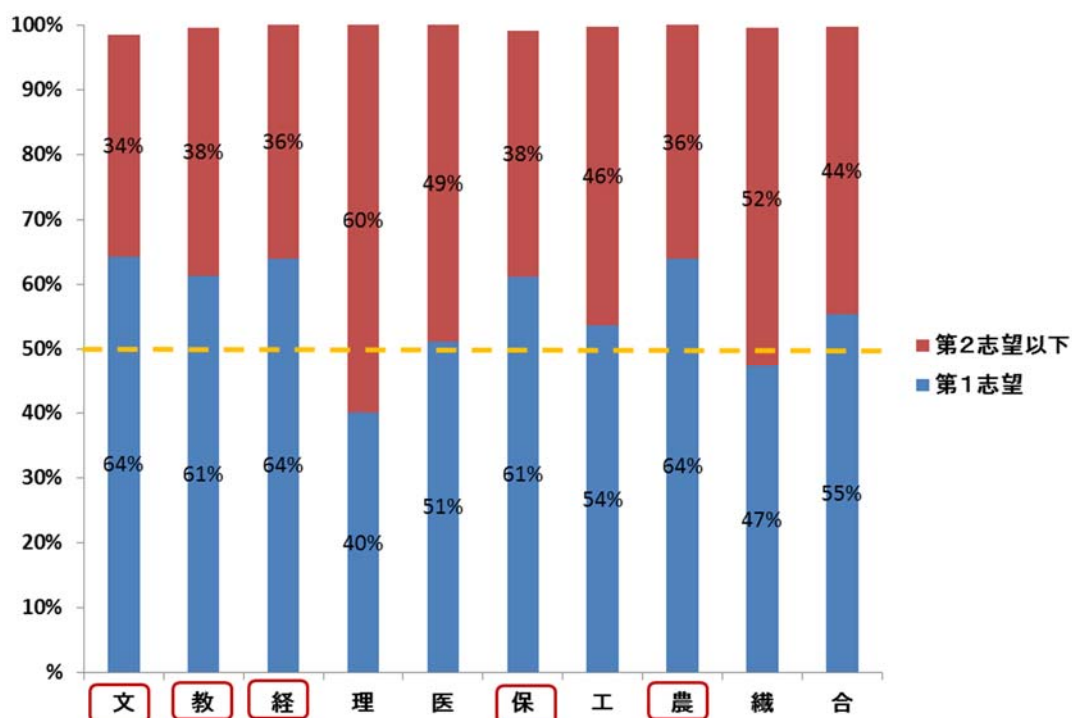


図 8 不本意入学の割合

図 8 は、「あなたの志望大学の中で、本学は何番でしたか」という問いに対する回答である。本報告書では「第 2 志望以下」との回答を「不本意入学」とする。

人文学部の新入生は併願が多いにもかかわらず、本学を第 1 志望とする学生は 64% に達している。その他に本学を第 1 志望とする新入生が多いのは、経済学部 (64%)、農学部 (64%)、教育学部 (61%)、保健学科 (61%) の学生である。

一方、第二希望以下、言い換えれば「不本意入学」の学生数が多い学部は理学部 (60%) と繊維学部 (52%) である。

3.4. 受験方式（Q13）

全学からみれば、7 割以上の学生が一般入試で進学した。人文学部では一般入試の学生が最も多く、94% に達している。一方、工学部の 3 割近く (28%) は公募推薦で進学した。

表 4 受験方式

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
一般入試（国公立大学の前・中・後 期日程、及び私立大学の一般入試）	94%	73%	70%	83%	86%	85%	66%	70%	76%	74%
公募推薦	—	25%	22%	6%	9%	11%	28%	20%	22%	20%
指定校推薦	—	—	—	—	3%	—	1%	—	—	1%
A0選考	1%	—	—	6%	—	—	—	5%	—	1%
留学生入試	—	—	6%	1%	—	—	2%	2%	1%	1%
その他の試験（帰国子女入試など）	5%	2%	2%	4%	2%	4%	3%	4%	2%	3%

3.5. 進学理由（Q20）

表 5 進学理由（「とても重要+やや重要」の回答）

進学理由	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
本学の合格可能性が高かった	77%	70%	74%	79%	80%	77%	77%	79%	79%	76%
入試科目が自分にあった	80%	66%	62%	68%	70%	67%	72%	71%	71%	70%
大卒の学歴を得ることができる	74%	60%	74%	54%	48%	74%	72%	69%	67%	66%
学生生活を楽しんでみたかった	71%	60%	66%	49%	38%	61%	68%	70%	64%	62%
本学で学ぶ内容に興味があった	67%	61%	47%	50%	59%	58%	55%	79%	77%	61%
資格を取ることができる	47%	86%	42%	43%	82%	93%	49%	50%	39%	58%
ひとり暮らしができる	51%	47%	52%	47%	42%	45%	59%	52%	54%	51%
本学のウェブサイトを開覧した	41%	50%	51%	31%	40%	50%	50%	57%	51%	48%
卒業生の就職がよい	23%	51%	54%	16%	29%	60%	50%	32%	70%	46%
学費が適当であった	54%	41%	50%	29%	56%	51%	48%	38%	44%	45%
本学の研究に対する評価が高い	20%	32%	26%	32%	32%	40%	41%	48%	67%	40%
本学の教育に対する評価が高い	24%	56%	31%	26%	37%	42%	36%	38%	47%	40%
他大学の合格可能性が低かった	30%	35%	32%	40%	34%	46%	43%	33%	43%	39%
本学の校風に魅力があった	40%	39%	38%	25%	34%	43%	32%	53%	34%	37%
本学の規模が適当であった	43%	30%	32%	28%	30%	44%	36%	42%	31%	34%
高校の先生に勧められた	37%	36%	28%	27%	22%	34%	39%	33%	40%	34%
本学の社会活動に対する評価が高い	17%	33%	29%	17%	28%	32%	27%	34%	30%	28%
親の希望	34%	35%	29%	19%	27%	28%	29%	17%	26%	28%
オープンキャンパスに参加した	26%	30%	35%	19%	14%	33%	19%	35%	26%	25%
すぐに働きたくなかった	31%	16%	30%	22%	14%	20%	29%	29%	26%	24%
大学説明会・進学相談会に参加した	17%	29%	28%	11%	17%	36%	22%	25%	20%	23%
本学以外に合格した大学がなかった	6%	23%	16%	31%	26%	20%	21%	23%	27%	23%
推薦、AO入試等で入学が早くに内定した	0%	22%	22%	13%	14%	18%	27%	22%	21%	21%
自宅から通学できる	10%	29%	23%	13%	10%	20%	18%	11%	14%	18%
本学のスポーツ活動に対する評価が高い	13%	18%	13%	11%	14%	23%	14%	11%	12%	14%
予備校や塾で勧められた	10%	11%	15%	11%	32%	15%	14%	14%	13%	14%
親族・親戚から進学を勧められた	21%	9%	12%	7%	11%	13%	11%	11%	11%	11%
友達が進学を希望した	6%	8%	15%	6%	6%	11%	15%	7%	6%	10%
本学に入学すれば奨学金が支給される	13%	7%	11%	9%	8%	12%	9%	5%	7%	9%
本学に進学した先輩から勧められた	3%	13%	11%	5%	8%	8%	7%	4%	6%	7%

表 5 は進学理由を学部ごとに示した内容である。進学理由については、全学でもっとも多くあげられた 6 項目は、「合格可能性が高かった」（76%）、「入試科目が自分にあった」（70%）、「大卒の学歴を得ることができる」（66%）、「学生生活を楽しんでみたかった」（62%）、「本学で学ぶ内容に興味があった」（61%）と「資格を取ることができる」（58%）である。学部によって、進学理由について若干異なる特徴がみられる。例えば、教育学部、医学科と保健学科は「資格を取ることができる」こと（80%、82%、93%）を進学が一番大きな理由としてあげられている。農学部は「本学で学ぶ内容に興味があった」（79%）、「本学の校風に魅力があった」（53%）のように、学部の魅力が学生を引き付ける要因となっている。繊維学部は「卒業生の就職がよい」こと（70%）、「本学の研究に対する評価が高い」こと（67%）が主な進学理由としてあげられている。

4. 保護者の関わり (Q19)

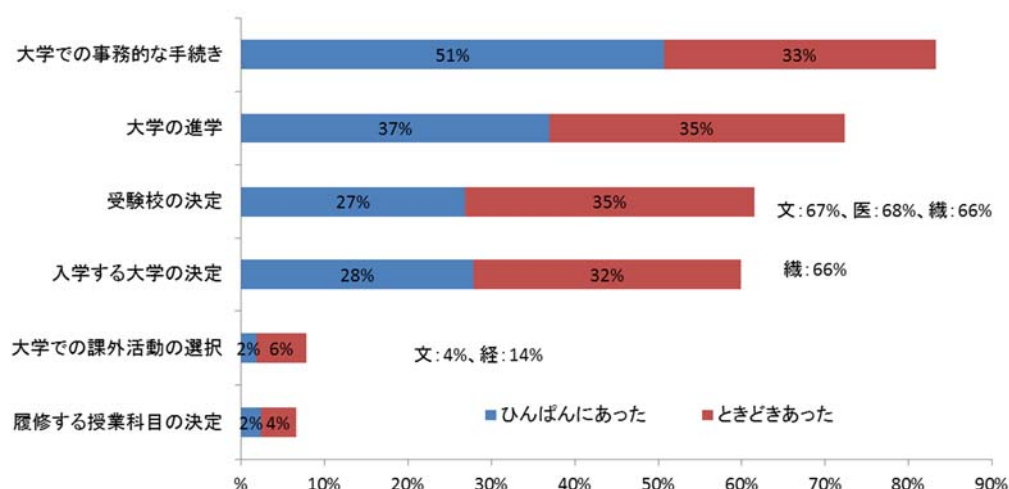


図 9 保護者の関与度

8. 大学進学及び進学後の手続きに関して、保護者がもっとも多く関わったのは「大学での事務的な手続き」である。新入生の 51%は「ひんぱんにあった」、33%は「ときどきあった」と回答している。それに次ぐのは、「大学進学」、「受験校の決定」及び「入学する大学の決定」である。保護者向けの説明会を開催する必要性が高い。

5. 信大における生活と学修

5.1. 生活

5.1.1. 住居形態と通学時間 (Q33, Q5)

表 6 住居形態

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
アパートやマンション	60%	52%	54%	62%	78%	69%	58%	57%	56%	59%
大学の寮や下宿	29%	24%	26%	22%	11%	16%	31%	30%	32%	26%
実家または親戚の家	10%	22%	17%	11%	7%	14%	8%	9%	8%	12%
無回答	1%	2%	3%	6%	3%	1%	4%	4%	3%	3%

表 7 通学時間

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
30分未満	93%	80%	87%	89%	94%	87%	94%	92%	91%	90%
30分以上－1時間未満	3%	7%	6%	4%	3%	3%	2%	4%	4%	4%
1時間以上－1時間30分未満	1%	8%	4%	3%	1%	6%	2%	2%	2%	3%
1時間30分以上－2時間未満	1%	5%	2%	5%	0%	2%	1%	1%	3%	3%
2時間以上	1%	1%	0%	0%	2%	2%	0%	1%	0%	0%

85%の一年生は「アパートやマンション」と「大学の寮や下宿」で一人暮らしをしている。「実家または親戚の家」に居住している学生は 12%にすぎない。90%の学生は片道通学 30分未満で大学の近辺に住んでいる。

5.1.2. 1年目の学費（生活費も含む）の財源（Q17）

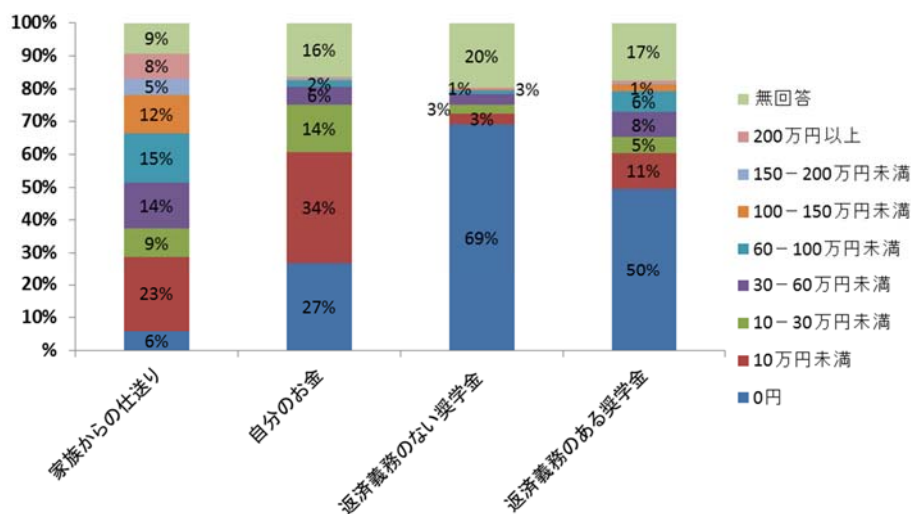


図 10 1年目の学費生活費の構成

図 10 は、1 年目の学費と生活費の出所を示す内容である。親から仕送りをもらっていない学生は 6%程度いる。仕送り額が 10 万円未満の新入生は 23%いるのに対し、100 万円以上の仕送りを受けている新入生も全体の 24%に達している。預貯金やアルバイトなどの自分のお金で学費と生活費を賄う新入生はおよそ 57%いる。その大多数（全体の 34%）は年間 10 万円未満である。

奨学金の受給状況をみてみれば、返済義務のない奨学金の受給率は 11%であり、返済義務のある奨学金の受給率は 33%となっている。言い換えれば、信大の新入生の中に 3 人に 1 人が貸与型奨学金を借りている。中には人文学部の新入生の中に、返済義務のある奨学金の受給率は各学部の中でもっとも多く、41%となっている。

5.1.3. 学費の支払いに不安があるか否か（Q18）

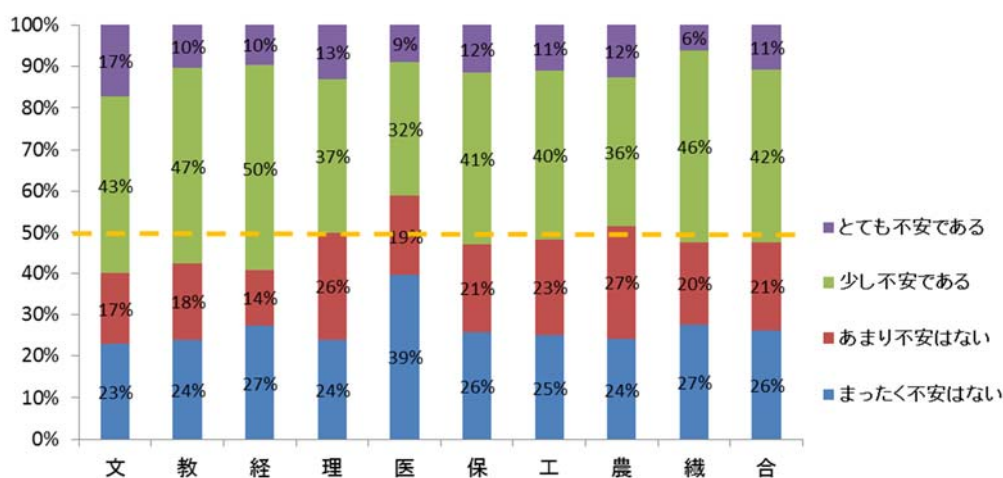


図 11 学費の支払いに不安があるか否か

「学費の支払いに不安はありますか」という設問に対し、半数以上（53%）の新入生は「少し不安である」と「とても不安である」と答えている。中には、人文学部の新入生の17%は「とても不安」であり、43%は「少し不安である」と回答している。これは人文学部の新入生の41%が返済義務のある奨学金を受給していることと関係があるだろうと推測される。学生に対する経済支援をより充実する必要があるであろう。

5.2. 学修

5.2.1. 学修支援の現状と希望（Q15）

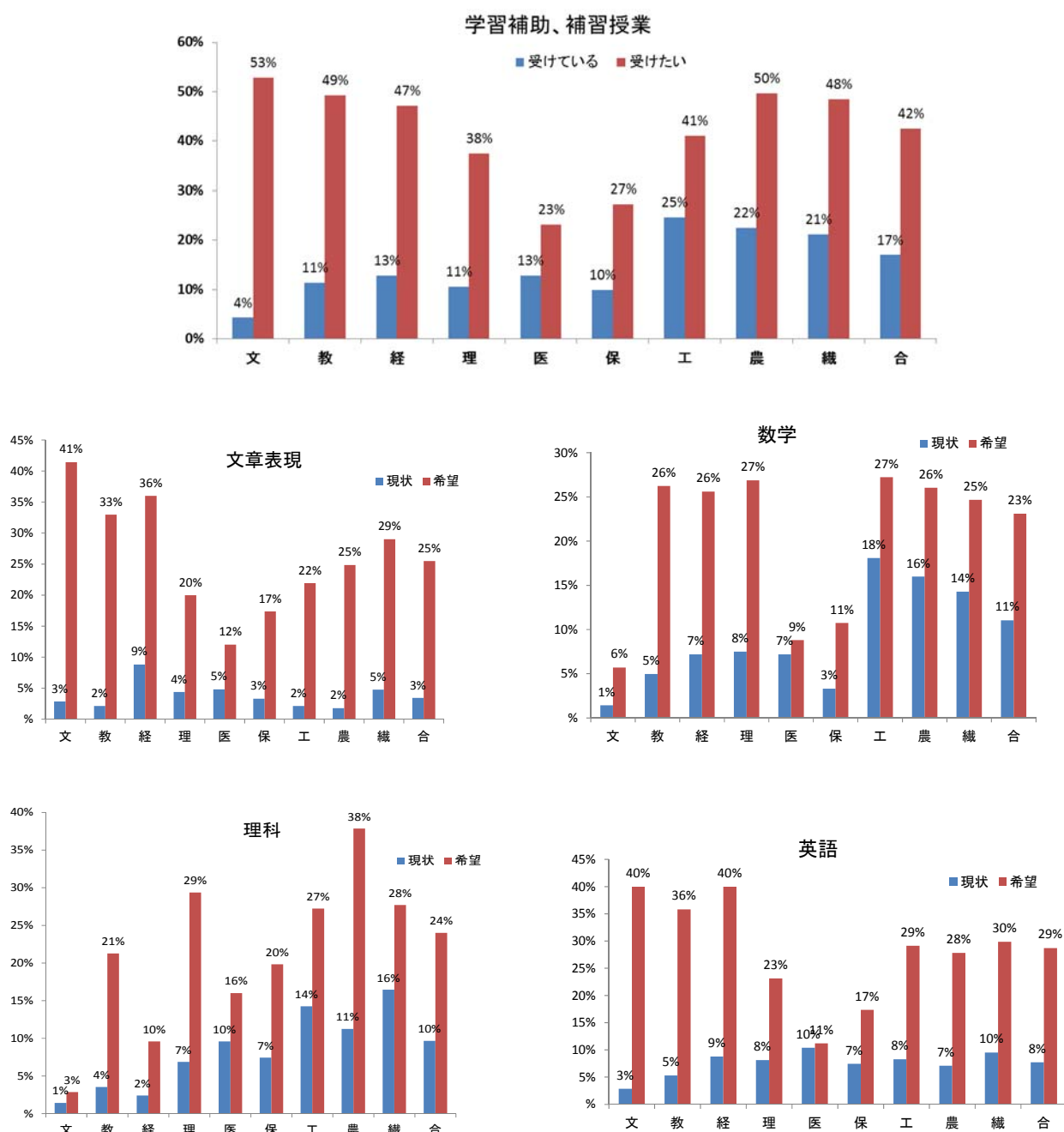


図 12 学習補助・補習授業の現状と希望

初年時で17%の学生は学習補助や補習授業を受けている。授業別でみれば、「数学」は11%でもっとも多い。それに次ぐのは「理科」の10%と「英語」の8%である。「文章表現」は3%でもっとも少ない。

「そのような支援を受けたいと思いますか」という設問に対し、半数近くの学生（42%）は学習補助や補習授業を希望すると回答している。学習補助や補習授業に対するニーズが新入生の中には高い。人文学部、教育学部、経済学部といった人文系の新入生の3割～4割、工学部、農学部、繊維学部の新入生の2割～3割は「文章表現」の学習補助を受ける希望を示している。他の科目と比べると、「文章表現」の必要性は往々に見逃されがちであるが、実際学生の中にはニーズが高いことが本調査で読み取れた。

「数学」の補助と補習について、工学部、農学部、繊維学部の新入生が受けている割合が高い（18%、16%、14%）。教育学部、経済学部、経済学部の新入生の中に「数学」の補習率は高くはないものの、希望者は調査対象者の25%を超えている。「理科」については、補習の希望率と実施率の差が大きい学部は教育学部、理学部と農学部である。「英語」について、医学科と保健学科を除き、多くの学部は学習補助と補習授業の希望が非常に高い。特に人文系の4割の新入生は「英語」の学習補助と補習授業を希望している。

信州大学において、新入生のリメディア教育は近年ますます充実するようになった。ただ、注目すべきは潜在的なニーズを持っている学生である。本調査では、いままで見逃されやすい「文章表現」に対して、新入生からは学習補助と補習授業を受けるニーズが高く、また教育、経済といった人文系の学部の学生は「数学」と「理科」の補助と補習に対するニーズを持っていることを示している。

5.2.2. 在学中の計画（Q30）

表 8 今後しようとする可能性の高いことがら（「ある程度ある＋大いにある」の回答）

	文	教	経	理	医	保	工	農	繊	合
学費を補うために仕事やアルバイトをする	84%	81%	80%	76%	76%	80%	74%	76%	76%	77%
学内や大学間の体育会・運動部、スポーツ同好会に所属する	42%	66%	51%	57%	72%	68%	65%	50%	64%	61%
大学での学業成績が平均以上であり、目指すキャリアを変える	51%	55%	69%	51%	73%	56%	60%	55%	66%	59%
ボランティア活動をする	32%	51%	44%	28%	35%	36%	22%	36%	27%	33%
留学生と交流する	39%	34%	39%	24%	34%	17%	25%	37%	26%	29%
専攻分野を変える	45%	35%	24%	40%	17%	19%	29%	26%	27%	29%
大学教員と定期的にコミュニケーションをとる	35%	32%	32%	38%	34%	23%	22%	30%	29%	29%
卒業や進級に必要な単位が足りなくて留年する	30%	18%	23%	39%	28%	30%	32%	30%	28%	29%
留学プログラムに参加する	30%	24%	25%	19%	27%	24%	16%	18%	20%	21%
留学生のルームメイトがいる	14%	14%	22%	11%	13%	11%	24%	27%	15%	18%
転学・編入する	10%	13%	17%	30%	11%	12%	13%	14%	18%	15%
個人的にカウンセリングを求める	17%	15%	11%	13%	10%	16%	10%	16%	15%	13%
学生自治会のメンバーになる	4%	4%	10%	14%	6%	6%	6%	5%	7%	7%
学生による抗議のための運動やデモに参加する	3%	3%	9%	13%	5%	2%	6%	7%	6%	6%

「今後しようとする可能性の高いことがら」を可能性の高い順から並べたのは表 7 である。77%の新入生はアルバイトをする可能性を示唆している。人文学部の 68%、教育学部、経済学部、理学部の 47%の新入生は「目指すキャリアの変更」を考えている。また、人文学部の 45%、教育学部の 35%、理学部の 45%の新入生は「専攻分野の変更」と考えている。さらに理学部の 30%の新入生は「転学と編入」を検討していると回答した。理学部では、不本意進学の新入生が 60%に達しているため、キャリア、専攻分野の変更が多くなったと推測される。これに対して、教育学部の学生の中に、第 1 志望で進学した学生が多いものの、キャリア・専攻分野の変更を考える人がそれぞれ 48%と 35%いる。この原因について、さらに検討する必要がある。また実際「専攻分野の変更」を考えている学生が一定の人数にのぼっていることに鑑み、大学としてはより柔軟な編入体制の導入を検討する必要性が考えられる。

6. 進路希望

6.1. 希望する学歴 (Q16)

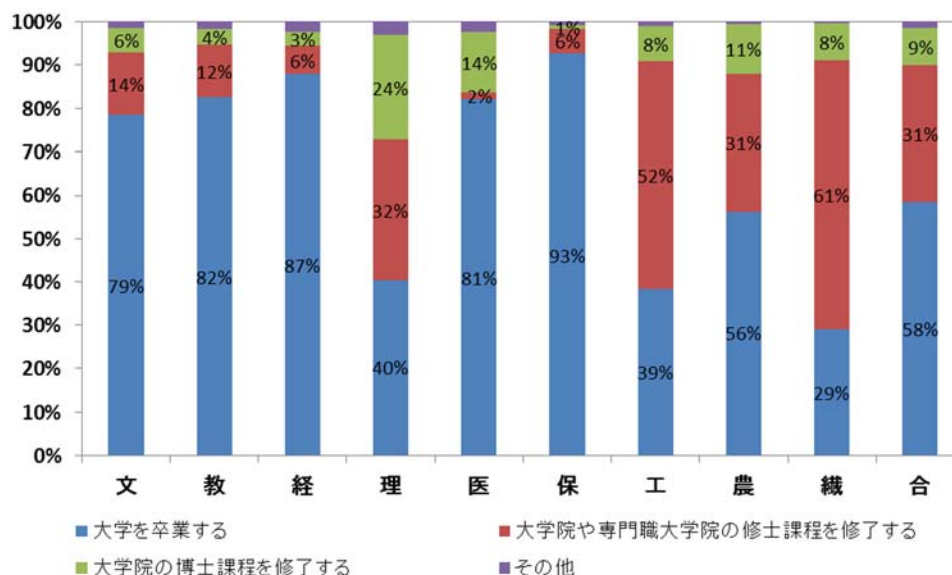


図 13 希望する学歴

新入生が希望する学歴について、人文系は学部まで、理工系は大学院までという特徴がある。中には繊維学部の 7 割、工学部の 6 割の新入生は進学時にすでに大学院の進学を希望している。また人文学部の新入生 20%（中には博士課程までが 6%）、教育学部の新入生の 16%（中には博士課程までが 4%）が大学院の進学を希望している。大学進学の時点で、学生の進路希望に応じるようにキャリア教育を実施する必要性が浮上した。

6.2. キャリア意識 (Q26)

大学卒業後のキャリアを考えると、信大生がもっとも重視するのは「生活の安定や保証」(93%)である。これに次ぐのは「自由な時間」(82%)と「高収入」(78%)である。生活を大切にする学生の特徴がみられる。一方、学部によってキャリアに対する考え方が極

めて異なる。例えば、教育学部は「高収入」、「就職時の選択肢の多さ」及び「知名度」よりは、「自己を表現する仕事」を望んでいる。教員としての意識と自覚を持っているように捉えられる。工学部と繊維学部は「高収入」、「世間的な知名度や地位」を希望すると同時に、「創造性や独創性」の仕事を求めている。学部の特徴を明確に表したキャリア意識と言える。

表 9 キャリア意識（「とても重要+やや重要」の回答）

	文	教	経	理	医	保	工	農	繊	合
生活の安定や保証	89%	95%	92%	89%	86%	93%	97%	91%	96%	93%
自由な時間	90%	78%	90%	83%	67%	73%	85%	88%	84%	82%
高収入の可能性	71%	69%	84%	68%	69%	72%	90%	72%	85%	78%
就職時の選択肢の多さ	61%	46%	67%	50%	46%	43%	75%	59%	70%	61%
社会を変えるための仕事	47%	62%	59%	50%	59%	52%	65%	62%	59%	60%
自己を表現する仕事	61%	68%	58%	52%	58%	44%	59%	53%	60%	58%
さまざまな領域の仕事をする可能性	41%	57%	53%	52%	59%	52%	63%	53%	59%	57%
創造性や独創性	57%	52%	39%	59%	48%	36%	64%	63%	63%	56%
世間的な知名度や地位	40%	45%	54%	49%	50%	39%	66%	50%	63%	54%
リーダーシップを発揮できる可能性	26%	43%	34%	38%	46%	31%	37%	33%	30%	36%

6.3. 人生観（Q25）

表 10 人生観（「とても重要+やや重要」の回答）

	文	教	経	理	医	保	工	農	繊	合
自分の生きたい人生を送る	96%	97%	97%	91%	93%	96%	94%	97%	94%	95%
友人関係を大切にする	91%	96%	95%	84%	90%	96%	93%	94%	91%	93%
家族を養う	84%	90%	90%	83%	87%	91%	89%	94%	87%	89%
困っている人の役に立つ	74%	85%	83%	77%	89%	95%	84%	92%	82%	84%
自分の専攻分野で仲間に認められる	61%	73%	60%	73%	82%	87%	83%	82%	80%	77%
お金持ちになる	51%	56%	71%	62%	50%	52%	80%	63%	73%	66%
多様な社会や文化を理解する	86%	75%	69%	58%	70%	61%	59%	69%	63%	66%
人生の意味を深く考える	76%	72%	61%	64%	66%	60%	55%	64%	56%	62%
会社などで出世する	43%	38%	64%	49%	37%	32%	73%	54%	62%	55%
自分の専攻分野で第一人者になる	33%	39%	34%	59%	63%	50%	67%	53%	61%	54%
地域社会の活動に参加する	39%	60%	65%	43%	61%	64%	47%	61%	40%	52%
環境を守るための活動に参加する	37%	49%	48%	49%	36%	45%	54%	80%	51%	52%
ビジネスで成功する	46%	33%	72%	43%	27%	21%	71%	51%	61%	52%
科学の理論的な発展に貢献する	11%	10%	16%	59%	56%	27%	54%	53%	67%	43%
社会の価値観に影響を与える	33%	36%	43%	40%	41%	31%	47%	44%	45%	42%
人権意識の向上に役立つ	36%	48%	48%	33%	44%	49%	33%	33%	26%	38%
企業や団体などで管理職になる	21%	22%	50%	32%	26%	27%	48%	33%	34%	35%
政治動向に関心を持つ	33%	39%	54%	26%	28%	39%	30%	31%	30%	34%
精神性や信仰心を生活に反映させる	19%	22%	22%	24%	32%	24%	26%	27%	23%	24%
地域社会のリーダーになる	13%	22%	37%	19%	27%	19%	22%	20%	19%	22%
政治的な活動にたずさわる	11%	14%	31%	18%	18%	13%	17%	18%	17%	17%
芸術作品を製作する	24%	12%	11%	15%	14%	10%	11%	11%	9%	12%
文芸作品を執筆する	23%	8%	12%	14%	17%	7%	9%	14%	12%	11%
舞台芸術で成功する	7%	4%	11%	10%	9%	7%	7%	8%	7%	7%

表 10 は新入生の人生観を表した内容を示している。上位にある 3 項目は「自分の生きたい人生を送る」（95%）、「友人関係を大切にする」（93%）、「家族を養う」（89%）といった内容である。自分の生活、友人と家族を大事にする意識が窺える。一方では「困っている人の役に立つ」心（84%）や「自分の専攻分野で仲間に認められる」意欲（74%）も多く確認される。

学部によって異なる価値観がみられる。例えば、教育学部の学生は「お金持ちになる」、

「会社での出世」、「ビジネスの成功」、「自分の専攻分野での成功」といった金銭、出世よりは、「多様な社会を理解する」、「地域活動に参加すること」を重視する。いわゆる「聖職者」意識が強いと考えられる。それに対して、経済学部学生は「ビジネスでの成功」、「お金持ちになる」、「会社での出世」の意識が強い。医学科、工学部、繊維学部の学生は「自分の専攻分野で仲間認められる」という専門分野で活躍する意欲もみせている。また農学部の新入生は「環境を守るための活動に参加する」する意識が圧倒的に強い（80%）。専門分野の特色を色濃く反映した回答である。

7. 評価（信大への満足度）

7.1. 制度・サービスへの満足度（Q29）

表 11 制度・サービスへの満足度（「満足+とても満足」の回答）

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
図書館の設備	35%	43%	46%	35%	36%	39%	46%	38%	42%	42%
コンピュータの施設や設備	35%	37%	28%	29%	23%	27%	35%	27%	34%	32%
健康保健サービス	33%	28%	25%	13%	25%	32%	26%	31%	27%	26%
コンピュータの訓練や援助	22%	20%	35%	19%	20%	25%	29%	20%	27%	25%
インターネットの使いやすさ	22%	27%	23%	22%	21%	25%	26%	17%	28%	25%
大学全体の学生数	29%	24%	24%	17%	22%	25%	26%	19%	18%	23%
奨学金など学費援助の制度	17%	17%	21%	17%	23%	21%	20%	16%	25%	20%
下宿やアパートの斡旋や紹介	14%	13%	21%	12%	15%	18%	20%	19%	21%	18%
心理相談やカウンセリングサービス	23%	18%	16%	12%	18%	23%	15%	19%	14%	17%
学生寮などの大学内の居住施設	17%	16%	17%	17%	14%	15%	18%	14%	16%	16%
実験室・実習室の設備や器具	10%	9%	13%	26%	22%	22%	15%	14%	17%	16%
ボランティア活動の機会	14%	19%	16%	14%	18%	15%	12%	15%	12%	15%
キャリアカウンセリング	21%	13%	20%	11%	12%	17%	14%	11%	13%	14%
就職の斡旋サービス	6%	8%	26%	9%	13%	17%	12%	8%	15%	12%
レクリエーション施設	10%	13%	10%	10%	12%	13%	11%	8%	9%	11%
リーダーシップ発揮の機会	12%	10%	9%	12%	14%	12%	10%	7%	10%	10%

新入生は、信大に対して、満足度が高いのは「図書館の設備」（42%）、「コンピュータの施設や設備」（32%）、「健康保健サービス」（26%）、「コンピュータの訓練や援助」（25%）や「インターネットの使いやすさ」（25%）の項目である。

7.2. 授業、教員、大学生活への満足度（Q34）

表 12 授業、教員、大学生活への満足度（「満足+とても満足」Top 10）

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
共通教育あるいは教養教育の授業	45.7%	31.9%	45.2%	29.3%	32.2%	31.1%	36.3%	31.5%	36.8%	34.9%
専門分野の授業	44.3%	37.4%	38.2%	37.6%	38.3%	44.1%	29.2%	23.2%	32.5%	34.0%
他の学生と話をする機会	30.0%	35.2%	37.9%	21.7%	35.8%	37.0%	25.2%	25.9%	30.3%	29.8%
大学での経験全般	34.8%	28.6%	30.6%	21.2%	38.3%	28.6%	25.6%	26.8%	31.6%	28.4%
語学の授業	30.0%	23.1%	30.6%	21.0%	33.3%	24.4%	25.5%	21.6%	25.0%	25.2%
授業の全体的な質	27.1%	19.0%	38.7%	19.7%	28.3%	32.8%	22.8%	16.7%	24.5%	23.9%
自然科学の授業	15.7%	11.4%	32.3%	30.6%	23.3%	17.6%	24.2%	24.0%	32.8%	23.6%
初年次生を対象とした教育プログラム内容	27.1%	26.4%	28.5%	19.4%	28.3%	17.8%	21.0%	19.9%	26.3%	23.4%
キャリア計画に対する授業内容の有効性	17.1%	21.2%	29.8%	12.7%	27.5%	28.6%	18.8%	15.6%	24.0%	21.0%
多様な考え方を認め合う雰囲気	21.4%	23.4%	25.0%	16.7%	26.7%	26.1%	16.8%	22.0%	20.2%	20.9%

表 13 授業、教員、大学生活への満足度（「不満＋とても不満」Top 10）

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
教員と話をする機会	36.2%	33.0%	18.7%	25.5%	15.8%	10.1%	24.7%	35.9%	23.1%	25.4%
履修や成績に対するアドバイス	27.1%	27.5%	16.9%	24.2%	15.8%	14.3%	23.1%	25.3%	24.5%	22.9%
個人別の学習指導や援助	18.6%	21.0%	12.1%	21.0%	12.5%	10.1%	19.9%	25.1%	20.5%	19.0%
大学における学生交流の機会	30.4%	18.8%	11.3%	20.5%	7.6%	10.1%	20.2%	15.6%	22.3%	18.0%
語学の授業	18.6%	19.4%	19.4%	24.8%	19.2%	14.3%	14.3%	16.2%	13.2%	17.0%
授業の全体的な質	15.7%	19.8%	12.9%	16.6%	17.5%	9.2%	16.3%	20.2%	17.5%	16.8%
大学のなかでの学生同士の一体感	23.2%	12.5%	12.9%	21.7%	9.2%	7.6%	18.5%	13.8%	19.7%	15.9%
他の学生と話をする機会	18.6%	15.8%	8.9%	18.5%	8.3%	7.6%	19.1%	11.4%	20.6%	15.8%
共通教育あるいは教養教育の授業	14.3%	16.1%	11.3%	14.6%	24.0%	10.9%	13.3%	12.5%	11.4%	14.1%
キャリア計画に対する授業内容の有効性	15.7%	19.4%	7.3%	21.0%	13.3%	7.6%	11.2%	12.6%	14.4%	13.8%

表 12 と表 13 では、信州大学における授業、教員、大学生活に対して、「満足＋とても満足」と「不満＋とても不満」の項目をそれぞれ Top10 の項目を示した内容である。Best10 と Worst10 の項目は同じ内容のものがある。恐らく学生の中で意見が分かれていることを推測される（たとえば「共通教育あるいは教養教育の授業」、「他の学生と話しをする機会」、「語学の授業」等々）。総じて言えば、信大生は大学の授業に対する満足度が高い。それに対して、信大生は「教員と話をする機会」、「履修や成績に対するアドバイス」、「個人別の学習指導や援助」などのような教員と学生との個人ベースの交流、あるいはアドバイスを求める機会の少なさにやや不満が残っている結果が読み取れる。

7.3. 学生生活の充実度（Q31）

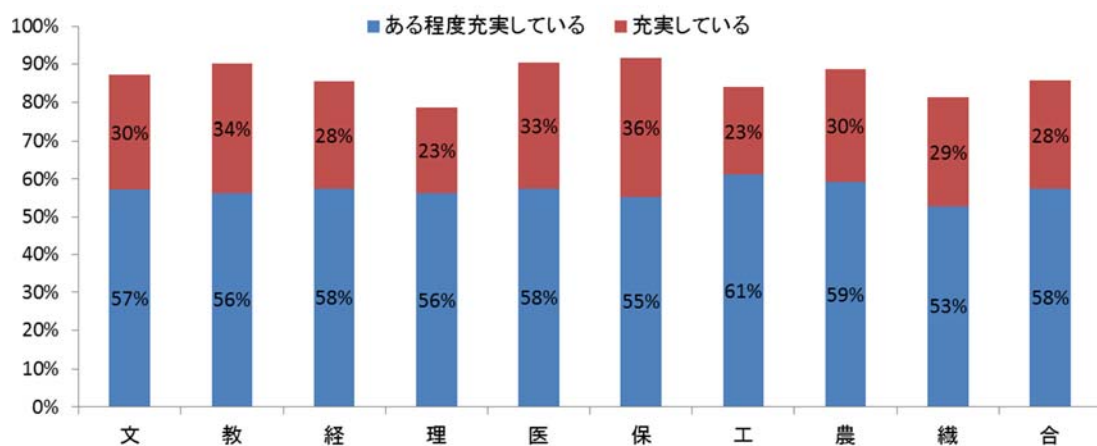


図 14 学生生活は充実しているか

総じていえば、一年生は信大での学生生活が充実しているとプラスに評価する学生が大多数である（86%）。中では、理学部の学生はポジティブな評価が全学平均より若干下回る（「ある程度充実している」＋「充実している」 79%）。

7.4. 大学全般への評価 (Q35)

「もし大学を選び直せたら、あなたはもう一度、本学に進学しますか。」という問いに対して、45%の信大生は「おそらく進学する」あるいは「かならず進学する」と回答した。これが「おそらく進学しない」と「進学しない」の割合（30%）を上回る回答である。学部別でいうと、教育学部、経済学部、保健学科、さらに農学部の学生は「進学する」というポジティブな姿勢を示す傾向が強い。一方、不本意進学率が若干高い理学部のほうは、マイナスな回答がやや目立つ。

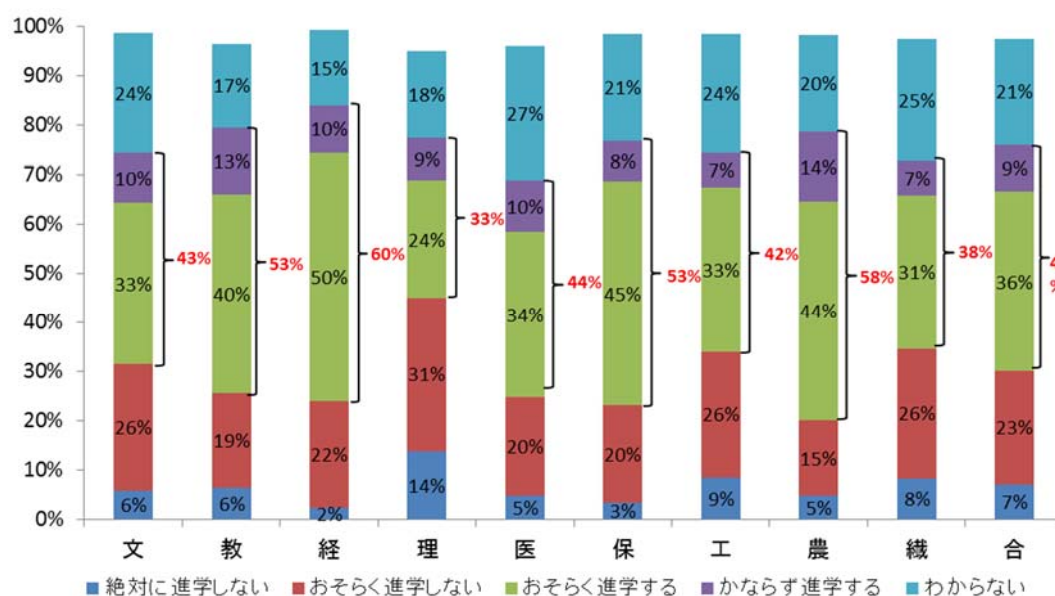


図 15 「もし大学を選びなおせたら、あなたはもう一度、本学に進学しますか。」

8. 自己評価 (Q23)

表 14 は同年齢の人たちと比べる時、「平均以上」と「上位 10%」とプラスに評価した内容である。大学全体から言えば、信大生が自信を持っている項目は「体の健康」、「ねばり強さ」、「競争心」、「協調性」、「他者の理解」、「やる気」、「自己の理解」、「チャレンジ精神」、「情緒面での安定度」、「一般的な教養」といった内容である（平均以上+上位 10%）。やや自信を欠けているのは「信仰心」を除き、「外国語の能力」、「文章表現の能力」、「プレゼンテーションの能力」、「コンピュータの能力」といったコミュニケーションに直結する能力である。

学部によって、新入生が自信を持っている項目が大きく異なっている。医学科の新入生はすべての項目に対して高い自信を見せている。

表 14 同年齢の人たちと比べる時の自己評価（「平均以上＋上位 10%」の回答）

	文	教	経	理	医	保	工	農	織	合
体の健康	36%	49%	43%	39%	43%	48%	46%	53%	52%	47%
ねばり強さ	24%	48%	31%	32%	53%	43%	30%	34%	35%	37%
競争心	23%	44%	34%	31%	48%	31%	34%	33%	34%	35%
協調性	41%	43%	37%	22%	38%	41%	32%	34%	31%	35%
他者の理解	41%	45%	36%	23%	33%	37%	33%	31%	33%	34%
やる気	24%	44%	28%	33%	42%	32%	31%	31%	29%	33%
自己の理解	44%	37%	35%	36%	39%	28%	27%	37%	31%	33%
チャレンジ精神	30%	44%	26%	34%	39%	30%	29%	31%	29%	32%
情緒面での安定度	29%	33%	32%	32%	32%	32%	34%	32%	27%	32%
一般的な教養	33%	26%	38%	34%	46%	20%	26%	28%	33%	30%
学力	21%	28%	28%	33%	72%	25%	19%	25%	30%	29%
数理的な能力	1%	21%	16%	37%	43%	26%	31%	20%	31%	27%
創造性	26%	25%	21%	26%	28%	17%	23%	21%	20%	23%
社交面での自信	20%	34%	26%	20%	26%	21%	20%	20%	17%	23%
リーダーシップ	10%	33%	25%	21%	33%	18%	15%	22%	20%	22%
文章読解の能力	33%	22%	22%	19%	38%	12%	15%	22%	23%	21%
知的面での自信	21%	21%	21%	20%	42%	16%	13%	18%	19%	19%
スピリチュアリティ(精神性)	16%	20%	19%	25%	30%	16%	17%	20%	16%	19%
芸術的な能力	29%	21%	15%	19%	20%	16%	15%	13%	17%	17%
コンピュータの操作能力	19%	9%	22%	19%	22%	12%	18%	10%	18%	16%
プレゼンテーションの能力	16%	16%	18%	16%	24%	16%	13%	13%	17%	16%
文章表現の能力	24%	17%	21%	12%	31%	13%	10%	12%	16%	15%
外国語の能力	17%	13%	17%	13%	42%	19%	9%	15%	12%	15%
信仰心	6%	6%	6%	7%	9%	6%	6%	9%	6%	7%

【総合的評価】

1. 不本意進学者について（すべて検定で有意である項目）

- ①高校の時の成績とは有意に関係しない。つまり高校の時、成績優秀者とそうでない学生の中には、いずれも不本意進学者が存在している。

表 15 不本意進学×高校の時の成績

	第 1 志望	第 2 志望以下	合計
上位の方	26%	25%	26%
中の上くらい	29%	31%	30%
中くらい	20%	17%	19%
中の下くらい	12%	13%	12%
下位の方	12%	12%	12%

- ②不本意進学者はより多数の学部に入學願書を出した。

表 16 不本意進学×願書提出数

	第 1 志望	第 2 志望以下	合計
1学部(本学部だけ)	48%	21%	36%
2学部	23%	23%	23%
3学部以上	29%	55%	41%

- ③本学の受験を決めた時期がやや遅い。8割近くがセンター試験後に進路を決定したのである。

表 17 不本意進学×本学の受験の決定

	第 1 志望	第 2 志望以下	合計
センター試験前	76%	21%	51%
センター試験後	24%	79%	49%

④不本意とはいえ、親、親族、高校の先生などの希望と勧めで進学した割合が高いことはない。自分の意思で信大に進学した学生が多い（表省略）。

⑤不本意進学者の中に「専攻分野を変える」可能性はそうでない学生より 10%多い。24%の不本意進学者は「転学・編入」の可能性を示唆している。一方、たとえ第 1 志望で信大に進学したとしても、進学してから半年後専攻分野の変更や転学・編入を考えている学生が一定の人数にのぼっている。したがって、より柔軟な編入体制を検討する必要性があると考えられる。

表 18 不本意進学×「専攻分野を変える」可能性

	第 1 志望	第 2 志望以下	合計
あまりない+まったくない	75%	65%	71%
ある程度ある+大いにある	25%	35%	29%

表 19 不本意進学×「転学・編入」の可能性

	第 1 志望	第 2 志望以下	合計
あまりない+まったくない	92%	76%	85%
ある程度ある+大いにある	8%	24%	15%

⑤不本意進学者は授業、学生同士とのつきあい、大学のサービス、及び大学での経験全般について「満足度が低い」という意見が第 1 志望で進学した学生より若干多い。

表 20 不本意進学×「大学での経験全般について」の満足度

	第 1 志望	第 2 志望以下	合計
不満+とても不満	5%	10%	7%
普通	59%	58%	58%
満足+とても満足	31%	25%	28%
わからない	6%	7%	6%

⑥「もし大学を選び直せたら、あなたはもう一度、本学に進学しますか」という問に対して、不本意進学者の 52%は、「進学しない」と回答している。ただし、23%は「進学する」可能性も示唆している。

表 21 不本意進学者×「再進学」の可能性

	第 1 志望	第 2 志望以下	合計
絶対に進学しない+恐らく進学しない	14%	52%	20%
恐らく進学する+必ず進学する	67%	23%	60%
わからない	19%	26%	20%

2. 学修支援を受けている人と受けない人

高校の時の成績とは相関がない。新入生の中には学習補助と補習授業に対するニーズが広く存在している。また大学への満足度への影響も特に確認されていない。

3. 「共通教育あるいは教養教育の授業」の評価と学修支援との関係

表 22 「共通教育あるいは教養教育の授業」の評価×学修補助・補習授業の受講

	文章表現**		数学**		英語***		学修補助、補習授業(全体)+	
	学習支援を受けている	受けていない	学習支援を受けている	受けていない	学習支援を受けている	受けていない	学習支援を受けている	学習支援を受けていない
不満+とても不満	7%	13%	7%	14%	7%	14%	9%	15%
普通	47%	51%	53%	50%	50%	51%	52%	49%
満足+とても満足	43%	35%	39%	35%	41%	35%	38%	34%
わからない	3%	1%	1%	1%	1%	1%	1%	1%
合計	60	1482	193	1368	135	1397	298	1430

注：***0.1%で有意、**1%で有意、*5%で有意、+10%で有意。

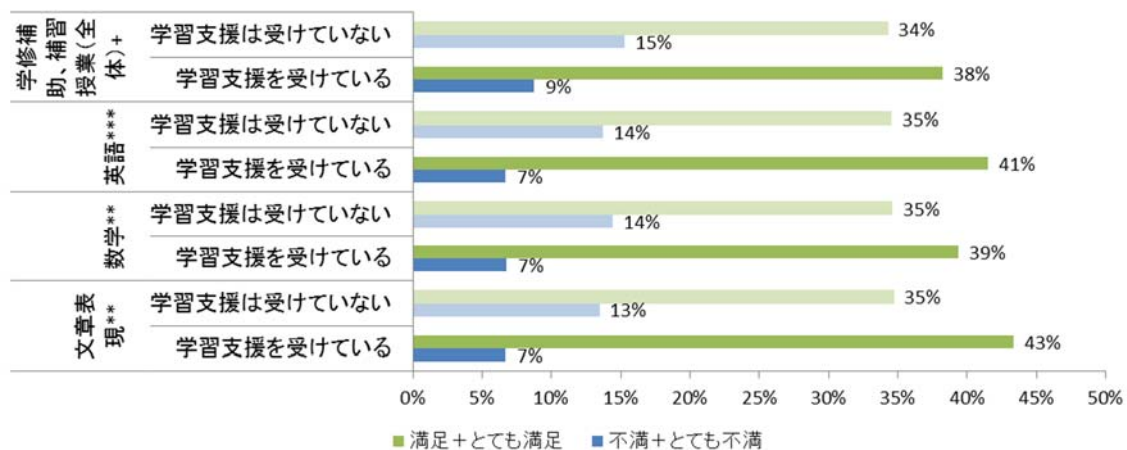


図 16 「共通教育あるいは教養教育の授業」の評価×学修補助・補習授業の受講

「共通教育あるいは教養教育」に対する評価と「学修補助、補習授業」の関係をみると、補助あるいは補習を受けている学生の方が、受けていない学生より満足度が高く、不満が低いという関係がみられる。特に不満の割合は前者が後者の半分しかない。学習支援は共通教育あるいは教養教育の満足度を上げる効果があると考えられる。

学 習 時 間 に 関 す る ア ン ケ ー ト

このアンケートは、学生のみなさんの学習行動を把握することで、信州大学の教育課程と教育の内容をより良くするために行うものです。みなさんの回答は統計的に処理されますので、プライバシーが他の人に知られる心配は全くありません。実際に行っていることを、正直にそのままお答えください。回答する際には、該当する番号に○をつけてください。ただし、問5と問8は数字で答えてください。

問 1. あなたの性別を教えてください。

1. 女 37.0 2. 男 63.0

問 2. あなたの学部・学科等を教えてください。該当する学部と学科に○をつけてください。

- | a. 学部 | b. 学科・課程・系 | |
|---------|--------------------|---------------------|
| 1. 人文学部 | 1. 人文学科 8.9 | 2. その他 |
| 2. 教育学部 | 3. 学校教育教員養成課程 11.5 | 4. 特別支援学校教員養成課程 1.3 |
| | 5. 生涯スポーツ課程 5.2 | 6. 教育カウンセリング課程 0.8 |
| 3. 経済学部 | 7. 経済学科 5.1 | 8. 経済システム法学科 2.6 |
| 4. 理学部 | 9. 数理・自然情報科学科 1.8 | 10. 物理科学科 2.4 |
| | 11. 化学科 2.0 | 12. 地質科学科 1.7 |
| | 13. 生物科学科 2.2 | 14. 物質循環学科 1.2 |
| 5. 医学部 | 15. 医学科 5.8 | 16. 保健学科 7.1 |
| 6. 工学部 | 17. 機械システム工学科 4.1 | 18. 電気電子工学科 5.2 |
| | 19. 土木工学科 2.6 | 20. 建築学科 |
| | 21. 物質工学科 3.0 | 22. 情報工学科 4.9 |
| | 23. 環境機能工学科 2.8 | |
| 7. 農学部 | 24. 食料生産科学科 3.5 | 25. 森林科学科 |
| | 26. 応用生命科学科 2.8 | |
| 8. 繊維学部 | 27. 繊維・感性工学系 3.6 | 28. 機械・ロボット学系 2.9 |
| | 29. 化学・材料系 6.1 | 30. 応用生物科学系 2.6 |
| | 31. その他 0.1 | |

問 3. あなたはどの入試に合格し、信州大学に入学しましたか。あてはまるものを 1 つ選んでください。

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 一般入試（前期日程） 57.2 | 2. 一般入試（後期日程） 20.9 |
| 3. AO入試 0.3 | 4. 推薦入試（センター受験あり） 5.7 |
| 5. 推薦入試（センター受験なし） 14.3 | 6. 帰国子女入試 0.2 |
| 7. 中国引揚者等子女入試 | 8. 社会人入試 0.1 |
| 9. 私費外国人留学生入試 1.0 | 10. その他 0.4 |

問 4. あなたは現在、**授業時間以外**にどこで学習をしていますか。あてはまるものを**すべて**選んでください。

1. 自宅や寮の自室 88.9
2. 図書館 40.2
3. 生協の食堂やパンショッブ 32.9
4. 各学部のラウンジ 8.4
5. 全学教育機構の空き教室やコンピューター室 4.1
6. キャンパス内のその他の場所 9.3
7. キャンパス外の場所（自宅や寮を除く） 13.4

問 5. 授業時間を除いて、あなたは現在、**自学自習（予復習を含む）**にどの程度の時間を使っていますか。**一週間あたりの授業時間外**の学習時間について、具体的な学習時間数を記入したうえで、右のあてはまるものを1つ選んでください。

一週間あたり

5.9 時間

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 0 時間 3.2 | 2. 1 時間未満 6.8 |
| 3. 1～2 時間台 23.6 | 4. 3～5 時間台 29.7 |
| 5. 6～10 時間台 20.0 | 6. 11～15 時間台 8.5 |
| 7. 16～20 時間台 3.7 | 8. 20 時間以上 4.4 |

問 6. あなたが履修している授業のうち、ほぼ毎週予復習を要する科目（例えば、宿題、小テスト）は、いくつありますか。

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 1 科目 14.8 | 2. 2 科目 27.8 |
| 3. 3 科目 24.7 | 4. 4 科目 11.9 |
| 5. 5 科目以上 11.9 | 6. ない 8.9 |

問 7. あなたは、**一か月あたり**平均何冊本を読みますか（マンガや雑誌は除く）。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 0 冊 43.5 | 2. 1 冊 25.1 |
| 3. 2～4 冊 22.7 | 4. 5～7 冊 5.6 |
| 5. 8～10 冊 1.1 | 6. 11 冊以上 2.0 |

問 8. あなたは現在、**今学期一週間**にいくつの科目を履修していますか。科目数を数字で答えて下さい。

11.7 科目

ご協力ありがとうございました。

学生相談センター

学生相談センターは、学生の様々な困り事について解決に向けて一緒に考えていくセンターです。大学生活を送る中で、学生自身が自己管理する力や問題解決する力を養っていけるよう、サポートしていきます。学生相談コーディネーターや教職員、看護の専門スタッフが皆さんと一緒に考え、学生生活をより充実できるようお手伝いします。

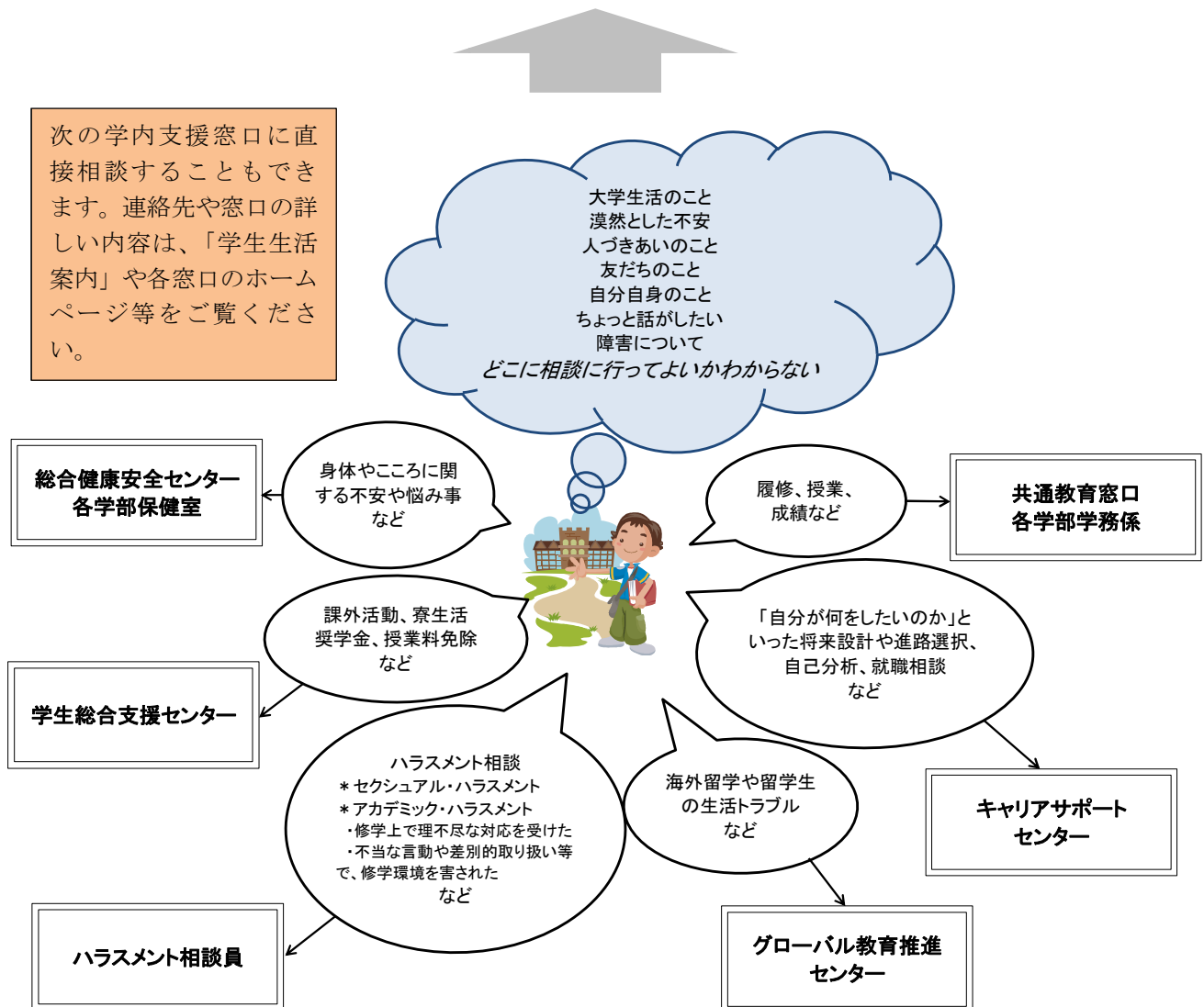
また、今年度から障害学生支援室を設置し、障害のある学生の修学上の支援もします。

場所 全学教育機構 南校舎1階(松本キャンパス内)

連絡先 ☎0263-37-3165 ✉nandemo@shinshu-u.ac.jp



次の学内支援窓口に直接相談することもできます。連絡先や窓口の詳細な内容は、「学生生活案内」や各窓口のホームページ等をご覧ください。



学生相談センターからの刊行物

学生向け「快適なキャンパスライフのために」
保護者向け「学生相談センターより保護者の方へ」

保護者の皆様へのお願い

学生時代は、何かを達成することはもちろん、つまずいたり、悩んだりしながら大きく成長していく時期です。この時期のつまずきや悩みは自分自身を見直し、生き方を決定するために必要なプロセスです。信州大学では、様々な学生支援の窓口をそろえてありますが、学生さんの様子を全て把握できるわけではありません。日々の状況や生活の見守りについては、保護者の皆様のご協力が欠かせません。

○信州大学学生相談センター規程

(平成 23 年 12 月 22 日信州大学規程第 182 号)

改正

平成 25 年 4 月 1 日平成 25 年度規程第 5 号

平成 25 年 11 月 21 日平成 25 年度規程第 30 号

平成 26 年 9 月 18 日平成 26 年度規程第 31 号

平成 26 年 10 月 16 日平成 26 年度規程第 38 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、信州大学学則（平成 16 年信州大学学則第 1 号）第 12 条第 4 項の規定に基づき、信州大学学生相談センター(以下「センター」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(目的)

第 2 条 センターは、学内共同教育研究施設として、各学部、全学教育機構、総合健康安全センターその他関係部局(以下「学部等」という。)と緊密に連携協力し、学生生活を支援するための学生相談に関する業務及び障害者基本法（昭和 45 年法律第 84 号）第 2 条第 1 号に定める障害者である学生（入学手続を完了した者等を含む。以下「障害学生」という。）の支援を行うほか、学生の自殺を防止するために必要な支援を行うことを目的とする。

(業務)

第 3 条 センターは、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 学生相談の実施に関すること。
- (2) 学生相談に係る情報の収集、管理及び分析に関すること。
- (3) 学生相談を受けた事項の解決に向けた提案に関すること。
- (4) 学生の成長発達を促すために必要な啓発活動に関すること。
- (5) 教職員を対象とした学生相談に係る研修の実施に関すること。
- (6) 障害学生の支援（障害者教育支援の実施に関する研究を含む。）に関すること。
- (7) 学生の自殺を防止するために必要な対策の立案に関すること。
- (8) 学生の自殺を防止するための啓発活動に関すること。
- (9) 学生の自殺の発生状況、背景等の調査及び分析に関すること。
- (10) その他学生相談、障害学生の支援及び学生の自殺防止に関すること。

(組織)

第 4 条 センターに、次の各号に掲げる職員を置く。

- (1) 学生相談センター長(以下「センター長」という。)
- (2) 学生相談センター副センター長(以下「副センター長」という。)
- (3) 専任教員
- (4) 学生相談コーディネーター
- (5) 事務職員
- (6) その他必要な職員

(学生相談委員会)

第 5 条 センターの運営に関する事項の審議は、国立大学法人信州大学学生相談委員会において行う。

(センター長)

第 6 条 センター長は、学生担当の副学長をもって充てる。

2 センター長は、センターの業務を掌理し、所属職員を指揮監督する。

(副センター長)

第 7 条 副センター長は、総合健康安全センター長をもって充てる。

2 副センター長は、センター長の職務を補佐し、センター長に事故があるときは、その職務を代行する。

(学生相談コーディネーター)

第 8 条 学生相談コーディネーターは、センターと学部等との連絡調整を行う。

(学生相談室)

第 9 条 センターの業務を円滑に行うため、各学部及び全学教育機構に学生相談室を置く。

2 学生相談室に関し必要な事項は、各学部長及び全学教育機構長が別に定める。

(障害学生支援室)

第 10 条 障害学生の支援について必要な業務を円滑に行うため、センターに障害学生支援室を置く。

2 障害学生支援室に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第 11 条 センターの事務は、学務部学生支援課において処理する。

(雑則)

第 12 条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

この規程は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 25 年 4 月 1 日平成 25 年度規程第 5 号)

この規程は、平成 25 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 25 年 11 月 21 日平成 25 年度規程第 30 号)

この規程は、平成 25 年 11 月 21 日から施行する。

附 則(平成 26 年 9 月 18 日平成 26 年度規程第 31 号)

この規程は、平成 26 年 9 月 18 日から施行し、平成 26 年 4 月 1 日から適用する。

附 則(平成 26 年 10 月 16 日平成 26 年度規程第 38 号)

この規程は、平成 26 年 10 月 16 日から施行する。

○信州大学学生相談センター障害学生支援室細則

(平成 26 年 10 月 16 日信州大学細則第 97 号)

(趣旨)

第 1 条 この細則は、信州大学学生相談センター規程(平成 23 年信州大学規程第 182 号。以下「センター規程」という。)第 10 条第 2 項に基づき、信州大学学生相談センター（以下「センター」という。）に設置する障害学生支援室（以下「支援室」という。）の組織及び運営について必要な事項を定める。

(業務)

第 2 条 支援室は、次の各号に掲げる業務を行う。

(1) センター規程第 2 条に規定する障害学生（以下「障害学生」という。）のうち、信州大学に在籍する学生に係る学生生活及び修学の支援に関すること。

[センター規程第 2 条]

(2) 障害学生のうち、入学手続を完了した者等の受入に係る事前相談及び受入方針の策定に関すること。

(3) 障害学生の支援に必要な情報の収集、管理及び分析に関すること。

(4) 障害学生の支援について学外の関係機関と連携し必要な調整を行うこと。

(5) 障害学生の支援に係る啓発活動に関すること。

(6) その他障害学生の支援に関すること。

(組織)

第 3 条 支援室は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

(1) 障害学生支援室長（以下「室長」という。）

(2) 事務職員

(3) その他センターが必要と認めた教職員

(室長)

第 4 条 支援室に室長を置き、センターの専任教員をもって充てる。

2 室長は、支援室の業務を掌理し、所属職員を監督する。

(事務)

第 5 条 支援室の事務は、学務部学生支援課において処理する。

(雑則)

第 6 条 この細則に定めるもののほか、支援室に関し必要な事項は、センターが別に定める。

附 則

この細則は、平成 26 年 10 月 16 日から施行する。

学生相談委員会

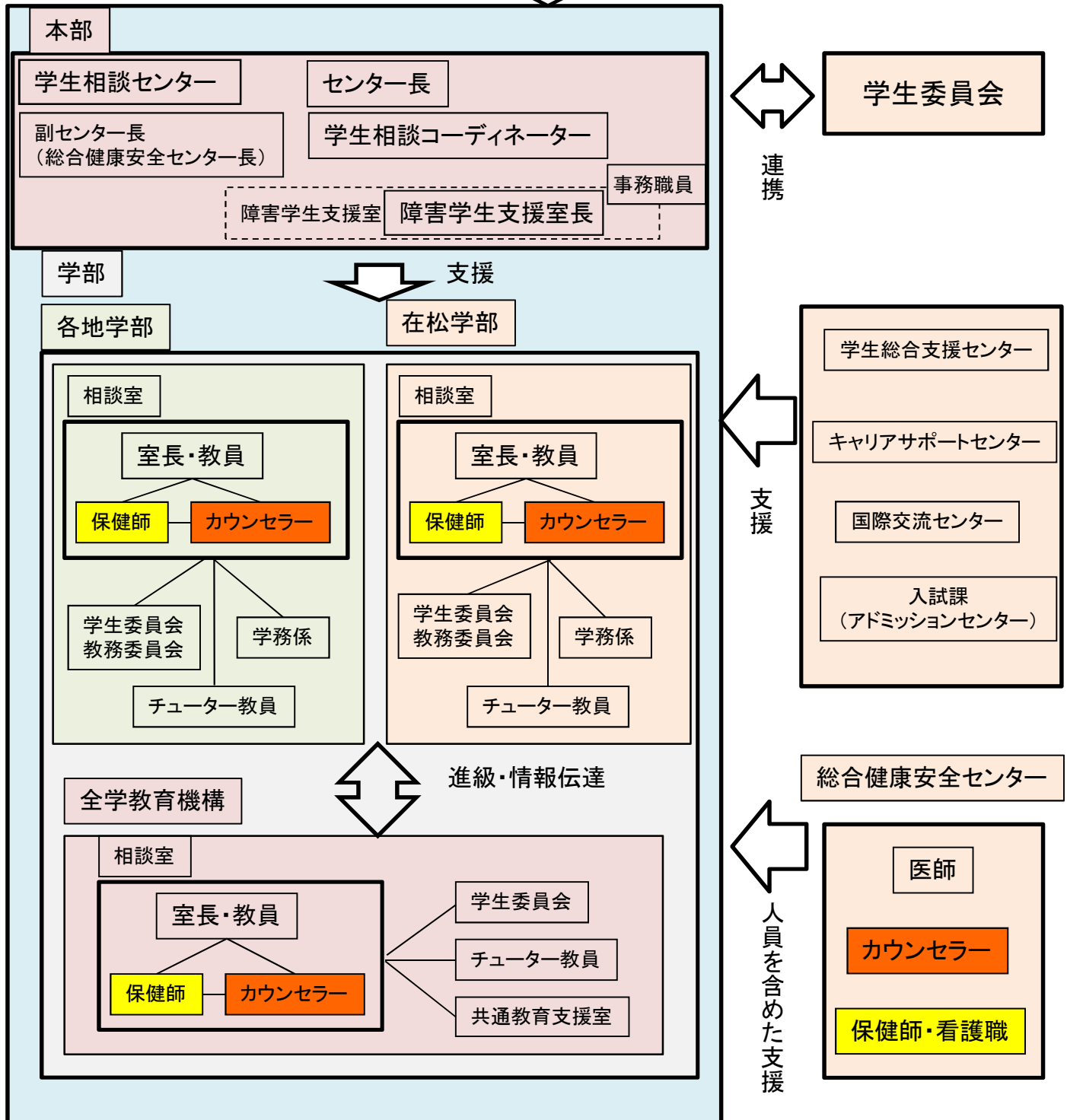
委員長：学生担当副学長(総括責任者)

副委員長：総合健康安全センター長

委員：学部等の学生相談室長又はこれに準ずる者1人、障害学生支援室長、
学生相談コーディネーター、学務部長、学生支援課長、その他委員会が必要と認める者

審議事項：学生相談(自殺防止対策を含む)及び障害学生支援に係る施策及び啓発活動に
関すること、学生相談センターに関すること

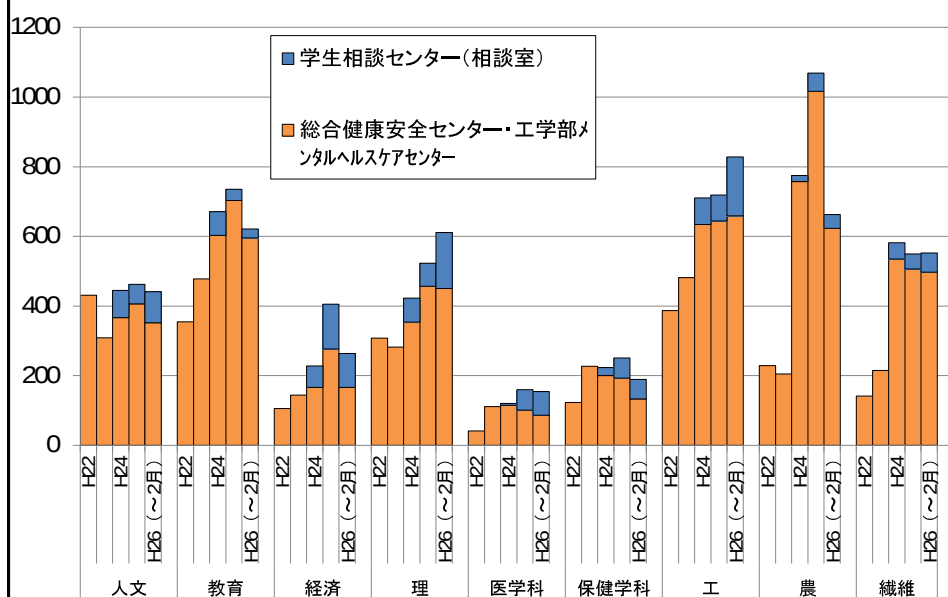
対策の実施



学生相談全体の利用状況

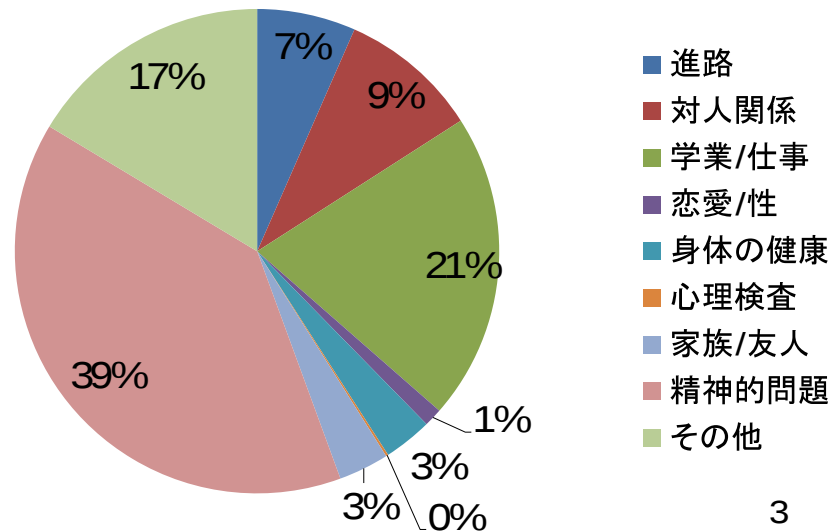
1

学部別学生相談(のべ)件数の推移

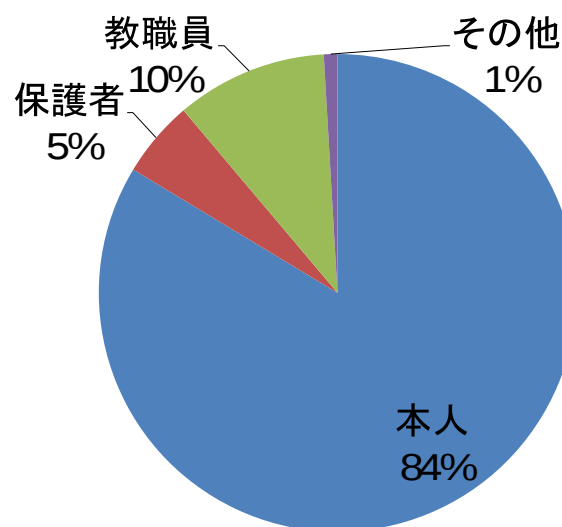


2

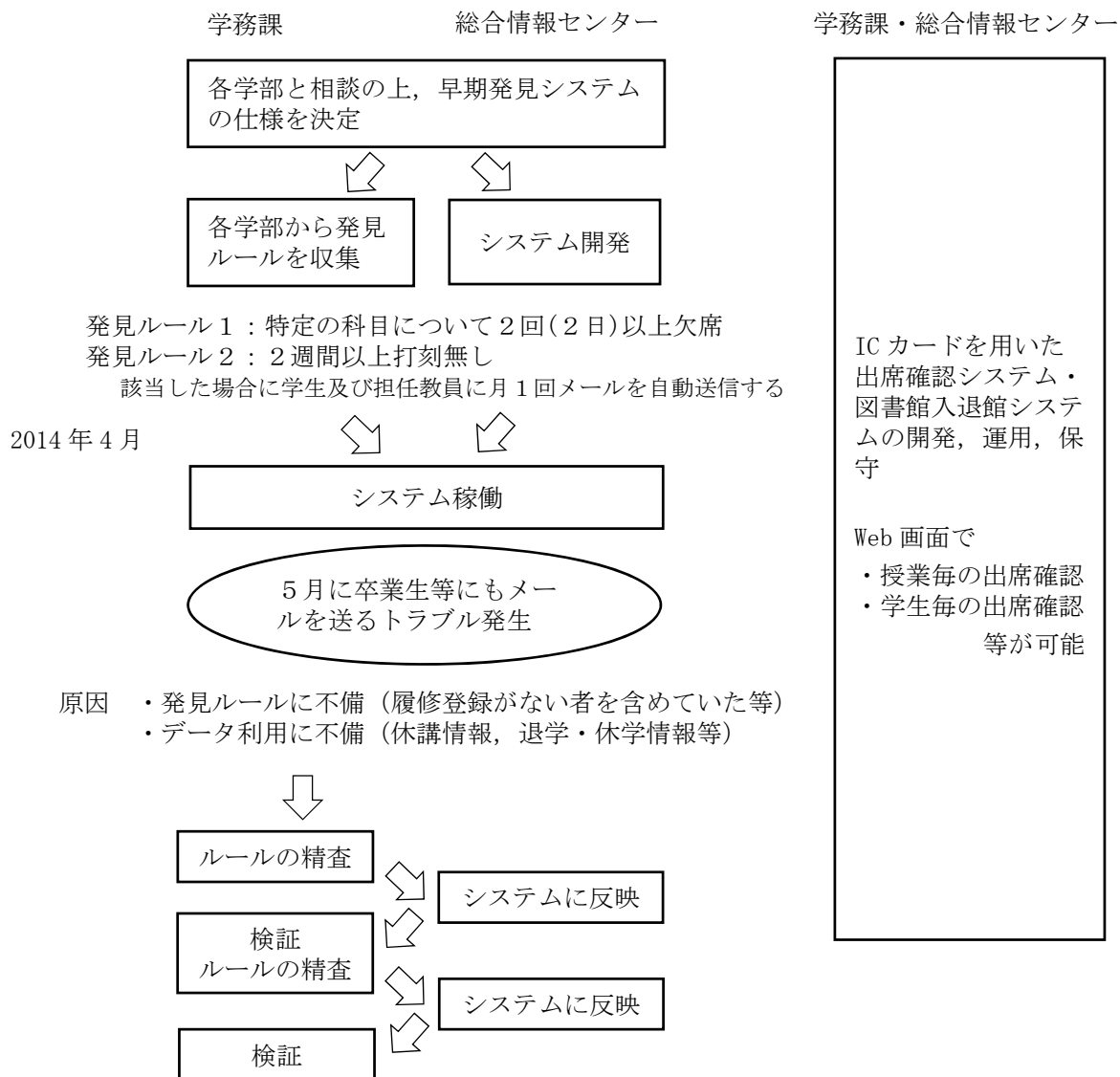
H26年度（～2月）相談内容の内訳（新規）



H26年度（～2月）初回相談者内訳



出席確認システム 連続欠席者に対するメール送信機能について



現在提供可能なデータ

学年	性別	対象期間	区分	対象科目名	学籍番号	学部	学科	学生氏名	学生メールアドレス
【発見ルール1】該当科目が複数の場合は、1つの科目のみ抽出									
1	女	Nov-14	科目指定	●●学	14X0001A	○○学部	○○学科	○○ ○○	14x0001a@shinshu-u.ac.jp
1	女	Nov-14	科目指定	●●学概論	14X0003B	○○学部	○○学科	○○ ○○	14x0003b@shinshu-u.ac.jp
【発見ルール2】									
1	女	Nov-14	全科目	-	14X1001D	○○学部	○○学科	○○ ○○	14x1001d@shinshu-u.ac.jp
1	男	Nov-14	全科目	-	14X1003E	○○学部	○○学科	○○ ○○	14x1003e@shinshu-u.ac.jp

1～3年生についてはある程度の検出が可能

[運用上の課題]

- ・発見ルール1 (対象科目指定) では、教室変更情報、休講情報の登録に漏れがあると多くの学生が抽出されてしまう。
- ・発見ルール2 (全科目指定) では、卒業研究等のICカードリーダーが設置されていない場所で実施される科目のみしか履修登録がない学生 (ほとんどが4年生) が対象になってしまう。

9 GPA 制度について

信州大学では、学生が適切に履修計画をたて、自主的、意欲的に学習することを促すとともに、適切な修学指導に資することを目的として、平成26年度学部入学生から、「GPA（グレード・ポイント・アベレージ）制度」を導入しています。

このGPAは、世界の大学で広く用いられている学生の成績評価方法です。会社に就職する、大学院に進学する、海外の大学に留学するような場合に応募先での採否の判断となるものです。

教員は、GPAを活用することにより成績不振学生を早期に発見し、適切な指導に繋げることができます。

9-1. GPA について

「GPA」とは、秀、優、良、可及び不可の5種の評語をもって表した成績の単位数に、それぞれの科目のGP（Grade Point）を掛けて合計したものを、履修登録を行った単位数の合計で割って計算した、GPの平均値（Average）です。評語と評点とGPの関係を以下に示します。

評語	評点	GP
秀（S）	90-100	4
優（A）	80-89	3.33
良（B）	70-79	2.67
可（C）	60-69	2
不可（D）	50-59	1
不可（F）	0-49	0

※各科目の単位修得には、「可」以上が必要です。

9-2. GPA の計算式について

$$GPA = \frac{[\text{履修登録した科目の単位数} \times \text{当該科目のGP}] \text{の合計}}{\text{履修登録した科目の単位数（不可（D・F）を含む、履修取消した授業は除く）合計}}$$

【GPA の計算例】

授業の成績	GP の計算
科目A（2単位）でB（良）を取った	$2.67 \times 2 = 5.34$
科目B（4単位）でA（優）を取った	$3.33 \times 4 = 13.32$
科目C（2単位）でD（不可）を取った	$1.00 \times 2 = 2.00$
科目D（4単位）でS（秀）を取った	$4.00 \times 4 = 16.00$
科目E（2単位）でF（不可）を取った	$0 \times 2 = 0$

$$\begin{aligned} GPA &= (5.34 + 13.32 + 2.00 + 16.00 + 0) \div (2 + 4 + 2 + 4 + 2) \\ &= 36.66 \div 14 \\ &= 2.62 \end{aligned}$$

※小数第3位を四捨五入した数値を小数第2位まで表示し、その値をGPA値とします。

1. 履修登録した科目のうち、GPAの計算式に入らない科目があります。

- ① 成績を「合格」・「不合格」で評価する科目
- ② 他大学等で単位修得し、本学が「認定」とした科目
- ③ 学部で指定する科目（所属学部毎にお知らせします。）

※履修取消した授業科目は、GPA計算式から除外されます。

2. 「不可（D・F）」の科目を再履修して合格（単位修得）した場合、再履修前の「不可（D・F）」の成績はGPAの計算式に入りません。

- ・同じ科目名の授業でなければ「再履修」にはなりません。
- ・「不可（D・F）」と成績評価された科目を、再び履修登録して合格した場合は、「可」以上（GP = 2～4）の成績がGPAの計算式に入り、「不可」（GP = 0, 1）の成績は合格した学期以降のGPA計算式から除外されます。なお、再履修して再び「不可（D・F）」と成績評価された場合も、再履修後のGP値に置き換わります。
- ・授業は来年度も同じものが開講されるとは限りませんので、再履修ができない場合もあります。「履修登録した科目は必ず合格する」という覚悟が必要です。

9-3. GPAの通知について

- ・学期毎に、キャンパス情報システム*（Web）から、成績評価と、科目ごとのGP値及び学期毎・在学中の通算のGPA値が確認できます。
- ・学期毎及び在学中の通算GPA値を確認することで、学習成果の指標としましょう。例えば、1年次前期のGPA値が2.0以下であった場合、1年次後期や2年次以降の学習に支障をきたす可能性が高いので、1年次前期の内容を復習すると同時に後期の勉強の準備をしっかりとしましょう。
- ・なお、GPA値は担任との面談でも利用されます。

【キャンパス情報システム*（Web）修得単位確認画面】

修得単位確認				
学籍番号 14L9999X 氏名 徳州 花子 所属 人文学部				
科目区分	修得単位	履修単位	合計単位	GPA計算単位数
共通科目	36	2	38	36
教養科目	22	0	22	22
環境科学群	4	0	4	4
人文学群	6	0	6	6
社会科学群	6	0	6	6
自然科学群	4	0	4	4
芸術・スポーツ群	2	0	2	2
基礎科目	14	2	16	14
外国語科目	10	2	12	10
英語	6	2	8	6
中国語	4	0	4	4
健康科学科目	2	0	2	2
健康科学・理論と実践	2	0	2	2
新生ゼミナール	2	0	2	2
専門科目	60	20	80	50
必修科目	4	0	4	4
選択科目(A)	16	0	16	22
選択必修(A)	8	0	8	8
選択科目(B)	22	8	30	24
選択必修(B)	10	2	12	10
自由科目	18	12	30	18
== 合計 ==	96	22	118	86
教職に関する科目	4	0	4	4

GPA(学期)				
年度	前期		後期・通年	
	GPA	修得単位数	GPA	修得単位数
2014	3.45	22	3.17	26
2015	3.31	18	2.68	24
2016	2.50	10		

GPA(通算)		
GPA	修得単位数	GPA計算単位数
3.15	96	86

※単位数は修得した授業の単純合計です。卒業要件は考慮されていませんのでご注意ください。

閉じる

*...冊子巻末付録『用語解説』参照

信州大学における修学指導の実施について

1) 目的

平成26年度後期から開始する全学的な修学指導体制は、学生と担任が「面談の記録」を用いて面談を行うことによって、前学期のGPAを参照するとともに、学生自身の修学状況の振り返りを通して、当該学期の修学に向けての課題を明確にし、相互確認とそれに対する教員からの助言・指導を通して、継続的な学生支援の機会とすること、を目的とする。

2) 対象

原則として、全学部的全学生を対象とするが、各学部の事情に合わせて、実施対象を限定しても差し支えありません。

3) 面談実施時期

平成26年度後期から開始することとし、原則として、各学期開始時の履修登録確認・訂正期間までに実施することによって、面談の結果を当該学期の履修登録および修学内容に活かす。ただし、面談実施時期は、各学部の事情に合わせて変更することは可能である。

4) 面談の内容

面談時の基本的な項目は別紙2（『面談の記録』）に示す通りとする。なお、実施に当たって、学部ごとに、生活状況等についての項目を追加することは可能である。ただし、学生の個人情報となる「面談の記録」の取扱いについては、各学部で基本方針を設定し、その保管等について十分に注意することとする。

『面談の記録』 教員用マニュアル

『面談の記録』の使い方

- ・『面談の記録』は、学生と担任の先生が学期に一度面談する際に使うものです。面談をスムーズに進めるため、学生には面談の前にあらかじめ必要事項を記入するよう指示してあります。
- ・面談は、できる限り、成績が発表されてから次学期の履修登録確認・訂正期間までに行ってください。面談の予約方法については学部毎に異なりますので、学部のやり方に従ってください。
- ・学生には、ファイルに必要事項を記入し、2部印刷して、担任の先生と面談する時に、その印刷版を持って行くよう指示しています。ファイルの保管については、学部のやり方に従ってください。
- ・面談の記録のファイル名は 面談__〇〇〇〇（学籍番号）〇〇〇〇（学生の姓名） となっています。（例： 面談__14L0001A 信大花子.doc）

■教員に望まれること

1. 面談の目的は説諭ではなく、「教える」という態度は必要ありません。学生に質問し学生から話を引き出すことで、**学生に自分について考えさせる機会**としてください。
2. 学生に対するあなたの言動を学生がどう受け取るかは、ご自分を学生の立場に置いてご自分を見てみることで、ある程度想像がつくでしょう。様々なハラスメントに陥ることはそれで避けることができます。
3. 面談で得られた情報は、学生本人に対する教育的指導以外の目的で使うことはできません。

【1】GPAについて

まず、学生が記入してきた前学期の学期 GPA と前学期までの累積 GPA を確認してください。その上で、直前の学期までの GPA 値の推移について学生がどう思うか、特に成績が不良な学生には、

①勉強意欲が保たれているか、また

②勉強のしかたに不安はないか、

を聞いてください。次いで、学生にどうアドバイスしたかを簡単に記入してください。

成績が良い学生には、どういう勉強のしかたをしているかを聞いてください。そうすることで、その学生は自分の長所をはっきり認識し、さらに向上していくことが期待できるでしょう。成績が良い学生から聞いた勉強のしかたは、成績不良の学生への指導において参考になるかもしれません。

・D を取った科目

「D は『もう少しで合格』という意味だ」ということを学生と一緒に再確認した上で、再履修を勧めてください。

・F を取った科目

F を取った科目については、

③本人はその理由をどう考えているのか、

④他の科目でよい成績を取るなど、その埋め合わせをどうする計画であるのか

を聞いた上で、再履修を勧めてください。

・学生との面談に臨む際の態度

学生を叱ったり諭したりするという態度ではなく、何が問題であるのか、どうすれば打開できるのか、を学生と一緒に考えてあげてください。例えば GPA が 2.0 に満たない学生は（心の）健康面に問題を抱えているケースもあり得ます。「やる気が出ない」、「体調不良が続いている」などの悩みのある学生については、相談窓口（学生相談センター、総合健康安全センターや各学部の保健室など）にご相談ください。詳しい記述は、『教職員のための学生サポート・ガイドブック』の 16～17 ページにありますのでご覧下さい。

【2】出席状況等について

『キャンパス情報システム』で学生の全般的な出席状況を学生と一緒に確認してください。学生は、自分の出席状況に関する総合的な見解を記載するよう指示されています。また、特に自分で問題を感じているものがある場合には、その問題を簡潔にまとめ、書き入れるよう指示されています。

「問題」欄に何も書いていない場合でも、仮に何か問題がある場合にはこういう支援サービスが信州大学にはある、と、次ページの『学生相談センター』の案内を学生と一緒に見て、どういうサービスがあるのかを学期ごとに確認してください。一年次生には、大学生活になじめているか、戸惑うことはないか、特に慎重に確認してください。また上級生には、就職活動に関して悩みや困ったことがないかどうかとも確認してください。

面談の記録

- ・『面談の記録』は、学生と担任の教員が学期に一度面談する際に使うファイルです。学生は『学生用マニュアル』に従って面談に必要な準備を整えてください。教員は『教員用マニュアル』で使い方を見てください。
- ・面談の目的は、学生の修学状況を担任の教員と一緒に見て、考えるところにあります。叱責や懲罰の機会ではありません。

学籍番号 _____ 名前 _____

1 年次での面談者氏名 _____

2 年次での面談者氏名 _____

3 年次での面談者氏名 _____

4 年次での面談者氏名 _____

【1】GPA について

1 年次前期の GPA について	1 年次前期の GPA :	累積 GPA :
	学生の見解 : アドバイス内容 :	
1 年次後期の GPA について	1 年次後期の GPA :	累積 GPA :
	学生の見解 : アドバイス内容 :	
2 年次前期の GPA について	2 年次前期 GPA :	累積 GPA :
	学生の見解 : アドバイス内容 :	

2 年次後期の GPA について	2 年次後期の GPA :	累積 GPA :
	学生の見解 : アドバイス内容 :	
3 年次前期の GPA について	3 年次前期の GPA :	累積 GPA :
	学生の見解 : アドバイス内容 :	
3 年次後期の GPA について	3 年次後期の GPA :	累積 GPA :
	学生の見解 : アドバイス内容 :	
4 年次前期の GPA について	4 年前期の GPA :	累積 GPA :
	学生の見解 : アドバイス内容 :	

(過年度生は該当部分を追加して記入。以下同じ。)

(6 年制の学科では 6 年次まで。以下同じ。)

【2】出席状況について

1 年次前期の 状況	
1 年次後期の 状況	
2 年次前期の 状況	
2 年次後期の 状況	

3 年次前期の 状況	
3 年次後期の 状況	
4 年次前期の 状況	

信州大学学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

信州大学は、豊かな自然環境と、伝統ある歴史と文化に恵まれた信州に立地する大学です。本学では、かけがえのない自然や文化を愛する気持ちをもって、人類文化・思想の多様性を受け入れ、豊かなコミュニケーション能力を持つ教養人であるとともに、高度な専門知識と能力を備えて自ら課題を発見し、その解決にむけて挑戦する心をもった個性的な人材を育てることを理念・目標に掲げています。本学は、この理念・目標を踏まえて、以下に示す資質、知識や能力を、共通教育(教養教育、基礎教育)、専門教育及び課外活動を含む大学内外での幅広い教育活動を通じて培うこととし、ここに本学の学士課程に共通する学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)を定めます。

豊かな人間性

- みずからを他者や社会との関わりの中で捉え、自己啓発に努めることができる【自己認識・自己啓発マインド】
- 理想や倫理観をもって社会の平和的・持続的発展のために行動できる【社会的行動マインド】

人類知の継承

- 人類の知を継承し、それらの成果の上に立って未来について創造的に考えられる【人類知の継承と未来創造マインド】
- 世界の多様な文化、思想、歴史、芸術に関する幅広い素養がある【多様な文化受容マインド】
- 科学諸分野の歴史やその成果に関して幅広く理解できる【科学リテラシー】

社会人としての基礎力

- 日本語および外国語を用い、的確に読み、書き、聞き、他者に伝えることができる【言語能力】
- 対話を通じて他者と協力し、目標実現のために方向性を示すことができる【コミュニケーション能力、チームワーク力、リーダーシップ】
- 多様な情報を適切に取捨選択し、分析・活用できる【情報活用力】
- みずから問題を見出し、すじみちを立てて解決できる【問題発見・解決能力】

科学的・学問的思考

- 自然や社会の現象を普遍的な尺度や数量的指標を用いて理解できる【普遍的・数量的理解力】
- 専門学問分野における知識・技能を備え、それらを応用できる【専門知識と応用力】
- 専門以外の他分野に関する体系的な知識や素養がある【専門外の知識】

環境マインド

- 信州の自然・文化的環境への興味と関心をみずから深めることができる【地域環境に関する理解】
- 自然および人類社会が直面している環境問題を理解することができる【環境基礎力】
- 地球環境と人類文化との調和・共生のため、積極的に行動することができる【環境実践力】

各学部・研究科のディプロマ・ポリシーは信州大学ウェブサイトにてご覧いただけます。

※信州大学トップページ>大学案内>学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

<http://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/diploma/index.html>

信州大学シラバスガイドラインの見直しについて

【※下線部（赤字）が現シラバスガイドラインからの変更点】

このガイドラインは、信州大学で開講されるすべての授業のシラバスが備えるべき必須条件である。ただし、下記に記載する事柄をシラバスにおいて具体的にどのように表記するかについては、各学部学科の専門教育課程及び共通教育課程（以下、各学部）によって異なってくるため、より具体的な「シラバス作成の手引き」のようなものは、必要に応じて各学部において作成するものとする。

大学並びに各学部・学科等の定める『学位授与の方針』は、それぞれの教育課程の卒業生が卒業時に確実に身に付けていることが求められる能力・知識のリストであり、個々の授業は、学生が、大学並びに各学部・学科の『学位授与の方針』の能力・知識を身に付けるために配置されている。したがって、個々の授業が『学位授与の方針』のどの部分をどういう形で担っているのかをシラバスで明らかにするものとする。

『学位授与の方針』で定める能力・知識は、授業等を通して、学生が自分の努力によって手に入れるべきものである。シラバスでは、課題や小試験の内容と回数等、当該授業が担う『学位授与の方針』に至るまでに学生がしなければならないことを、学生が明確に理解できるように記述するものとする。特に、事前・事後学習のしかたについては、「受講生には、1単位当たり「45時間から授業時間を引いた時間量（下記の例参照）」の自主学習時間が課せられている」という『単位制度の実質化』の考え方に立ち、授業目標到達に向けて学生が何をしなければならないかを明確にする。その上で、それらが成績評価においてどのように扱われるのか、配点等を明らかにするものとする。

以上の考え方に立ち、以下の6項目を信州大学の授業のシラバスの必須記述項目とする。なお、シラバス作成に先立つ授業設計に当たっては、当該授業のカリキュラムの中での位置づけ・他の授業との関連を意識するものとする。

①授業の基本的な情報

授業名、担当者氏名、教室、開講日時（何曜日何時限目）、単位数、教科書、参考書。その他、各学部の必要に応じて記載する。

②授業が担う大学並びに学部・学科等の『学位授与の方針』の項目と、授業の達成目標

授業の達成目標は、この授業が担う『学位授与の方針』の項目をこの授業の言葉で言い換えたものとし、（知識面、スキル面、態度面の組み合わせで、またはいずれかの面で）「○○ができるようになる」という形を標準とする。

③成績評価の方法

受講者が②の達成目標に到達するために通っていく過程（課題や小試験等）と、到達したことを示すエビデンス（最終レポートや期末試験等）のそれぞれの内容と配点を記述する。

④成績評価の基準

この項では、「何ができているれば、授業の達成目標の水準から見て『卓越している』／『かなり上にある』／『やや上にある』／『その水準にある』と言えるのかを記述する。

筆記試験の場合の例：

授業で示した例題と同レベルの問題が解ければ「水準にある」、応用問題が解ければ「やや上にある」、やや難しい応用問題が解ければ「かなり上にある」、例題からは難しい応用問題が解ければ「卓越している」

レポートの場合の例：

(i) 問題の設定が適切であり、(ii) その問題の背景を説明できており、(iii) その問題にどのような課題があるのかを指摘できており、(iv) それらの課題に対して既存の学説が提示する解決法を適切に把握できており、(v) その上で自分の見解を提示できており、かつ、教員を感心させるレベルにあれば「卓越している」。(i) から (v) の 5 項目を満たしていれば「かなり上にある」。4 項目までできていれば「やや上にある」。3 項目までできていれば「水準にある」。

⑤事前・事後学習に関する情報

「受講生には、1 単位当たり『45 時間から授業時間を引いた時間量』の自主学習時間が課せられている」という『単位制度の実質化』の考え方に立ち、15 回の授業に対して受講生がしなければならない予習・復習も授業の一部であるものとして、その授業での事前・事後の自主学習に関する計画を記述する。

⑥授業計画

15 回の授業のおよその内容と順番、課される課題や小試験等のスケジュールを記述する。課題については、提出締切も示す。評価のための最終試験を行う場合は、15 回の授業とは別に行う。

⑦履修上の注意

当該の授業での教科書や参考書の利用方法、注意事項など

⑧オフィスアワー及び授業担当者の連絡先

【参考 1】

「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成する」ため、必要な自主学習時間は次のようになる。

例 1：週 1 回の授業で 1 単位の授業（45 時間の学修が必要）

授業時間 30 時間（2 時間×15 回）、自習学習時間 15 時間（1 時間×15 回）

例 2：週 1 回の授業で 2 単位の授業（90 時間の学修が必要）

授業時間 30 時間（2 時間×15 回）、自習学習時間 60 時間（4 時間×15 回）

【参考 2】

評定については次の評価基準を基本としている。

- 秀： 授業の達成目標の水準から見て卓越している
- 優： 授業の達成目標の水準よりかなり上にある
- 良： 授業の達成目標の水準よりやや上にある
- 可： 授業の達成目標の水準にある
- 不可 (D)： 授業の達成目標の水準よりやや下にある
- 不可 (F)： 授業の達成目標の水準にない

【参考 3】

「事前・事後学習に関する情報」では、例えば次のような趣旨の内容を書き込んでください。もちろん授業形態によりそれぞれの授業で事情が違いますので、現実的なやり方を一つもしくは二つ程度お書きください。

例

- ・「毎回の授業内容の欄に、教科書や副読本で予習しておくべき個所を指定する。」という趣旨をここで書いておいて、15 回の授業内容の欄に、教科書や副読本で予習しておくべき個所を指定しておく。
- ・「前週の授業内容の理解を問う毎回小テストを授業冒頭に行う。それに備えるためのワークシートを毎回配布するので、それを使って授業内容を毎回復習してから授業に臨むこと。」という趣旨を書く。
- ・「毎回リーディング課題を課す。授業開始直後にその理解を問う小テストを行うので、それに備えて課題をしっかりと読み込んでから授業に臨むこと。」という趣旨を書く。
- ・「毎回の授業の最後に、次の回につながる課題を出す。その課題はそれまでの授業内容を使えば答えを出せるようになっている。グループワークで使うので、必ず答えを作り印刷して持ってくる。それはグループワーク後に回収する。」という趣旨を書く。
- ・「毎回、授業終了後に予復習のためのワークを eALPS にアップする。それは次回の授業で回収するので、自分で印刷して持参すること。」という趣旨を書く。
- ・「毎回、授業後に内容確認の小テストを eALPS でアップする。受講生はそれに解答し、さらに自分が選んだ選択肢について、どうしてそれが正しい選択肢であるのかを隣の席の受講生に口頭で説明できるようにしておくことが求められる。」という趣旨を書く。

教員業績評価に係る自己申告書様式(2014年度:機構用)

学部等名：全学教育機構 所属センター：
職名：
氏名：

分野	教育	研究	社会活動	大学運営	計
重み設定					0.0

【注意】
各項目で、素点が100ポイントを超えた場合は、100ポイントまでの得点になりますが、超過分は機構長調整点の参考にしますので、当該年度(教育, 社会活動, 大学運営は平成24年度と25年度, 研究は平成21年度から25年度の5年間)の全ての業績を申告してください。

教育	対象期間: H24年度～H25年度(2012年4月～2014年3月)												
審査項目	学士 or 修士 or 博士	前期 or 後期 or 通年	授業分 担割合 (～1)	授業科目名	コマ数	自己算 定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点					
H24年度機構授業科目													
H24年度機構外授業科目													
H25年度機構授業科目													
H25年度機構外授業科目													
H24年度授業以外の教育実績 (機構外の学生教育指導を含む)	教育活動内容	貢献度 大・普通・小	担当教員数	活動期間・時間等 (and/or 対象学生数)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点						
			人										
			人										
H25年度授業以外の教育実績 (機構外の学生教育指導を含む)	教育活動内容	貢献度 大・普通・小	担当教員数	活動期間・時間等 (and/or 対象学生数)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点						
			人										
			人										
教育の質－目標達成事項 H24年度からH25年度にかけて、大学院、学部、全学教育の教育目標を実現するために、各授業科目につき、どのような努力を行い、どのような成果を挙げることができたか、下記(A)～(C)のうち成果を挙げたものを3授業科目挙げ、それぞれの授業ごとに証拠に基づいて述べ、そのために取り組んだ授業実践を記述する。 (A)授業に対する学生の授業参加度(出席・遅刻・早退などの改善、居眠り・私語・内職などの改善、集中力・発言・グループワーク参加などの向上、予習・復習の増加、課題提出率の向上など) (B)一学期の授業の結果としての学生の知識・思考・技術の深まりや修得の程度(レポートの質の向上、成績の上昇、単位取得率の上昇(＝途中放棄率の減少)など) (C)学生の満足度(授業アンケート結果、それ以外の学生からのフィードバックなど) 《上限18点》	担当科目名	受講者数	目標達成項目	取り組んだ授業実践の内容		自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点					
			(A)授業参加度										
			(B)修得の程度										
			(C)満足度										
			(A)授業参加度										
			(B)修得の程度										
			(C)満足度										
			(A)授業参加度										
			(B)修得の程度										
			(C)満足度										
教育の質－FD項目 H24年度からH25年度にかけて、大学院、学部、全学教育の授業改善を達成するために、どのような努力を行い、どのような成果を挙げることができたか(ピアレビュー等の活動内容は日時・参加人数等をできるだけ明確に記述すること。 (A)学内・学外のFD活動への参加、企画・運営 (B)教育関係の学会などへの参加・発表 (C)ピアレビュー(レビューワーとレビューイー双方が参加する①事前打ち合わせ、②授業レビュー、③事後フィードバック・省察を含む) (D)その他(個人的なコンサルテーション申し込み、関係図書の参照、同僚との懇談など) 《上限10点》	左記(A)～(D)のFD項目	場所・日時や期間	具体的な取り組み内容			自己算定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点					
教育の質－その他参考特記事項 (最大3件)													
教育分野						計	0.00	0.00					

研究		対象期間：H21年度～H25年度（2009年4月～2014年3月）																	
審査項目		著書名		共著の場合の分担者数		担当頁数		刊行先		刊行年月		自己算定点		審査委員会 チェック欄		審査委員会 査定点			
著書 （専門研究書）	著書（専門研究書）－単著																		
	編共著（専門研究書）－編者																		
	編共著（専門研究書）－共著																		
	研究教育関連教科書等－単著																		
	研究教育関連教科書等－編者																		
	研究教育関連教科書等－共著																		
審査項目		論文名		共著の場合の分担者数		担当頁数		掲載雑誌名		刊行年月		自己算定点		審査委員会 チェック欄		審査委員会 査定点			
論文	論文（専門研究論文）－単著																		
	論文（専門研究論文）－共著																		
	しかるべき評価又は権威ある機関等の査読を経た論文（専門研究論文）－単著（2倍算定）																		
	しかるべき評価又は権威ある機関等の表彰を経た論文（専門研究論文）－単著（3倍算定）																		
	著しい評価又は権威ある機関等の査読を経た論文（専門研究論文）－共著（2倍算定）																		
	著しいき評価又は権威ある機関等の表彰を経た論文（専門研究論文）－共著（3倍算定）																		
審査項目		国際の場合は「際」、国内の場合は「内」と記入		発表名等		単著 or 共著		会議名		会議場所		会議年月		自己算定点		審査委員会 チェック欄		審査委員会 査定点	
会議・学会発表等	会議・学会における招待講演																		
	研究発表・症例報告																		
	共同発表																		
その他学術・研究活動、貢献等	研究者受入	研究者名		国籍		受入期間		受入月数				自己算定点		審査委員会 チェック欄		審査委員会 査定点			
	科研費申請（単独・共同）	研究種目	研究課題						申請年度		自己算定点		審査委員会 チェック欄		審査委員会 査定点				
	科研費採択（単独）	研究種目	研究課題			分科細目番号		分担者数		交付年度		交付額（万円）		自己算定点		審査委員会 チェック欄		審査委員会 査定点	
	科研費採択（共同）																		
	科研費採択（共同かつ研究代表者）																		
	その他研究費採択（単独）	交付機関等名	研究課題			相当する分科細目番		分担者数		交付年度		交付額（万円）		自己算定点		審査委員会 チェック欄		審査委員会 査定点	
	その他研究費採択（共同）																		
	その他研究費採択（共同かつ研究代表者）																		
寄附金	H21年度受入金額（万円）				万円														
	H22年度受入金額（万円）				万円														
	H23年度受入金額（万円）				万円														
	H24年度受入金額（万円）				万円														
	H25年度受入金額（万円）				万円														
特許	H21年度出願件数				件														
	H22年度出願件数				件														
	H23年度出願件数				件														
	H24年度出願件数				件														
	H25年度出願件数				件														
	H21年度取得件数				件														
	H22年度取得件数				件														
	H23年度取得件数				件														
	H24年度取得件数				件														
H25年度取得件数				件															
研究の質－上記各項目から漏れたり十分評価されないもの及び強調したい研究成果について、特記事項として、客観的根拠を示して記述（少なくとも1件、最大3件）																			
研究分野												計		0.00				0.00	

社会活動		対象期間: H24年度～H25年度(2012年4月～2014年3月)							
審査項目		学会等名	国際の場合は「 際 」, 国内の場合は「 内 」と記入	役職名	役職就任期間	対象期間 就任月数	自己算 定点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点
学会等	学会運営活動(学会長・代表)								
	学会運営活動(その他役員)								
	学会運営活動(学会誌編集委員)								
	学会運営活動(大会実行委員長)								
	学会運営活動(大会実行委員)								
	地方部会・研究会運営活動(部会長・代表)								
	地方部会・研究会運営活動(その他役員)								
	地方部会・研究会運営活動(会誌等編集委員)								
	地方部会・研究会運営活動(大会実行委員長)								
	地方部会・研究会運営活動(大会実行委員)								
	政府等審議会等		審議会等名		役職名	役職就任期間	対象期間 就任月数	自己算 定点	審査委員会 チェック欄
中央行政機関審議会(会長)									
中央行政機関審議会(委員)									
都道府県行政機関審議会(会長)									
都道府県行政機関審議会(委員)									
市町村行政機関審議会(会長)									
市町村行政機関審議会(委員)									
大学外の公的試験の出題・採点・面接等の試験委員の業務 ※大学入試センター教科科目第一委員会員, 司法試験委員その他これに準ずる者の委員名の秘匿期間を経過した直後の年度で, その業務活動を算定する。		活動内容				活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄
省庁等が公募する特別な事業(JSTからの事業公募の審査, 科学研究費補助金)の試験委員の業務 ※委員名の秘匿期間を経過した直後の年度で, その業務活動を算定する。	活動内容				活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点
地域連携・産学官連携	連携活動内容				活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点
地域連携・産学官連携に伴う講演・講義等(出前講座等)	講演・講義題目等				時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点
国際交流活動	活動内容				活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点
その他社会活動	種別	活動内容			活動時期	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点
					社会活動分野	計	0.00		0.00

大学運営		対象期間: 対象期間: H24年度～H25年度(2012年4月～2014年3月)								
審査項目		役職名		就任期間		対象期間 就任月数		自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点
役職等										
全学委員会	委員会等名	委員長, 委員等種別	就任期間		対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点	
機構内委員会	委員会等名	委員長, 委員等種別	就任期間		対象期間 就任月数	活動量 (大・普通・小)	自己申告点	審査委員会 チェック欄	審査委員会 査定点	
					大学運営分野	計	0.00		0.00	

	教育	研究	社会活動	大学運営	部局長調整	計
審査点(加重前)	0.0	0.0	0.0	0.0	—	0.0
審査点(加重後)						0.0

※サンプル

No.

参 加 証 書

〇〇 〇〇 殿

貴殿は下記の FD プログラムに参加
し修了したことをここに証します

記

平成 27 年度新任教員研修
FD 研修「信州大学の学生について」

平成 27 年 4 月 2 日

信州大学長

山 沢 清 人

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter No.020

2013.5

- 信州大学の学生について
- FD活動報告
- センターからのお知らせ
- スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター

信州大学の学生について



各学部と先生方、職員の皆さまのご理解をいただき、2011年度より、新入生調査（全学部1年生対象・2011年7月）、学習時間調査（全学部1年生対象・2012年7月）大学生調査（全学部4年生対象・2012年12月・未分析）のそれぞれを、定期的の実施できるようになりました。センター員一同、厚く御礼を申し上げます。今回は、新入生調査と学習時間調査の結果をここでお知らせし、なぜ課題を出すことが効果的か、そして指導の中身は何になるのか、の2点について、考えてみたいと思います。

広がる学習習慣の差



2011年度の1年生（現在の3年生）が高校3年生の時の、授業時間以外の学習時間は、図1のようになっています。授業外で1週間当たり20時間学習していた学生が35%いる一方で（頼もしい数字です）、0～5時間しか学習していなかった学生が27%もいます。つまり、高3時に1日に1時間も学習していなかった学生が、この学年に限って言えば、4人に1人という割合で存在しているのです。

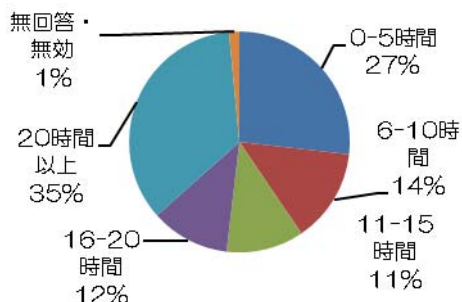


図1 高校3年生時の学習時間（新入生調査 2011年7月実施、1706人回答）

2012年に全学教育機構で実施した1年生の学習時間調査でも、同様の傾向がさらに強化された形で見られます。授業以外の学習時間が1週間当たり5時間に満たない学生が70%にのぼり、6時間から10時間は勉強するという学生（18%）を大きく引き離しています（図2）。「大学に入ると勉強しなくなる」という言説は、信大にもある程度当てはまっているようです（残念なことです）。

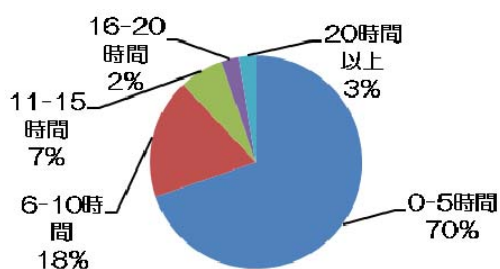


図2 学生の学習時間（学習時間調査、2012年度、1年生1947人回答）

学習時間を見るだけでも、学生が自分で「自主的に」学習するのが難しいことは想像に難くありません。この2つの調査は対象となった学年が1年ずれているため、直接の比較はできませんが、もしも、学生の傾向が似ていると仮定した場合、高3時に殆ど学習しなかった学生が大学に入学して学習時間が長くなるということは考えられませんか、自主的に学ぶということは、さらに難しいと考えられます。

さらなる分析も試みましたが、学習時間の多少を決定する要因を抽出することはできませんでした。学部別でも、入試形態でも、有意差は見つけられませんでした。唯一関係が見られたのが、読書量と性別です。一カ月間の読書量と学習時間には正の相関があり、平均すれば女子学生の方が学習時間は長くなっています。

宿題を出せば学生は学習するようになるか

宿題が出る授業の数別に学習時間の分布を見てみると、わずかに、宿題が出る授業が多い方が、学生が学習する傾向が見られます（図3）。ただし、ここからは、学習意欲のある学生が宿題の出る授業を積極的に取るのか、宿題があるから学生が学習するようになるのか、のどちらかを特定することができません。宿題が出ていても殆ど学習しない学生が一定数いることから、以下の点を指摘することができます。宿題が出てても、宿題をきちんとやったかどうかで問題にされない限り（たとえばその宿題が小テストの範囲になるとか、宿題の成績が最終成績に反映されるなど）、学生の方には時間をかけて宿題に取り組む理由がないということです。

つまり、意地の悪い見方をすれば、学生は、「勉強しなくとも単位をもらえると思っている」わけであり、実際に、勉強しなくとも進級できるし卒業もできてしまっている、という実態があるのではないかと思います。

まず学生に教える必要のあること



私たちは、学生の学習意欲を信じて、内発的動機づけ（その分野や学習そのものの面白さをアピールして学生に学習を促すこと）に努力するだけでなく、外発的動機付け（宿題をしなければ点数が取れないなどの賞罰システム）を上手く使わなければ、学生を学習に向かわせることができないこと、また、学習習慣そのものを教える必要があることなどが、この調査結果からは見えてきます。

授業内容や方法を改善するだけでなく、シラバスの表記や評価体系を明確に学生に示し、示した通りに実践することが求められるのは、ここにその理由があるのです。つまり、学生に（特に初年次生に対して）私たちがまず実践すべきこと

で、「学生は常に学習した上で授業に臨む必要があること」、そして、「それを怠れば、学生として成功できないこと」の2つを、学生に身をもって経験してもらうことです。この習慣を身付けてこそ、学生は「自主的に」自分の興味を深めていくことができるのです。

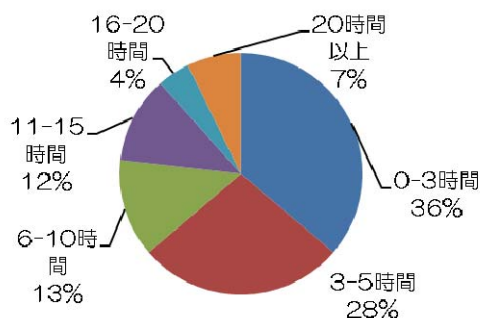


図3-1 学生の学習時間：宿題が出る授業「なし」 (69人)

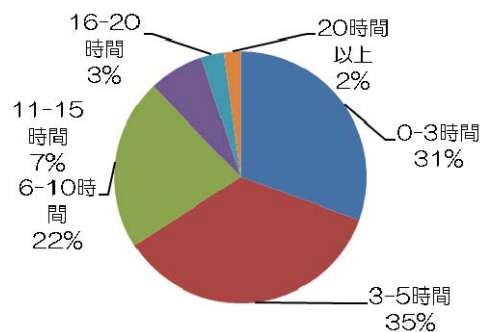


図3-3 学生の学習時間：宿題が出る授業「3-4科目」 (871人)

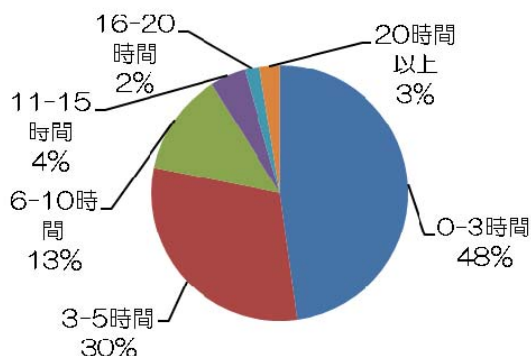


図3-2 学生の学習時間：宿題が出る授業「1-2科目」 (790人)

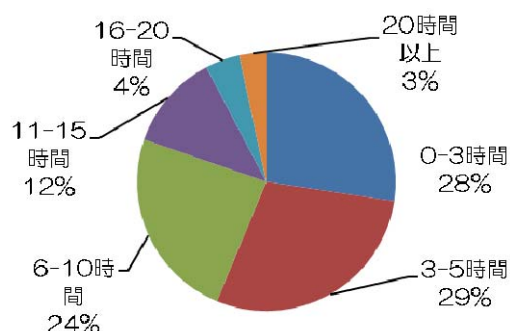


図3-4 学生の学習時間：宿題の出る授業「5科目以上」 (209人)

(担当：加藤善子)

活動報告

平成25年度信州大学新任教職員研修においてFDを行いました

4月2日(火)、平成25年度信州大学新任教職員研修の一環として「信州大学の教育について」をテーマとしたFDを高等教育研究センターが担当しました。当日は松本キャンパス理学部大会議室を主会場として各キャンパスに遠隔配信を行い、約30名の新任教員が参加しました。

アイスブレイキングから始め和やかな雰囲気になったところで、赤羽教務担当理事から歓迎の挨拶があり、続いて、小池高等教育研究センター長からGPA制度の説明がありました。次に、同センター加藤鉦三教授から、中教審答申の「学生に勉強させる」及び「『学位授与の方針』で大学が評価される」という2大テーマについて、またそれが教員個人にどのように関係があるのかについて説明がありました。続いて、同センター加藤善子准教授から、信州大学の学生について、平成23年度に実施した新入生調査の結果を基とした情報提供を行いました。最後に、同センター副センター長矢部正之教授(e-Learningセンター研究開発部門長)から、e-Learningの効用と利用の仕方について説明がありました。

新任教員にとっては信州大学の教育に関する重要事項をまとめて知る機会となり、またグループワークや発表も行われ、実りあるFD研修となりました。

◆◆当日の配布資料は高等教育研究センターウェブサイトにてご覧いただけます⇒<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/>



▲松本キャンパス会場の様子

お知らせ

高等教育研究センターでは、平成24年度に引き続き、平成25年度のFD活動の一環として、各部局からのご要望に応じて、部局に合う形でのFD活動を行います。ご希望がございましたら、下記担当(学務課教務グループ)までご連絡ください。

スタッフからひとこと

今年度より、理工学系研究科・総合工学系研究科の両研究科を跨ぐ5年一貫教育プログラムとして、学内版リーディング大学院「サステナブルエネルギーコース」が開始されます。そして、「平成25年度博士課程教育リーディングプログラム」の公募が開始されました。是非、今年度こそは採択されることを祈っています。

(学務部学務課大学院室主査 窪田実文)

信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

高等教育研究センター

■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1
 ■TEL: 0263-37-2194(担当: 学務部学務課教務グループ)
 ■MAIL: campus-rche_info@shinshu-u.ac.jp
 ■URL: <http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/>

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter

No.021

2013.6

- GPA制度導入に関する現段階でのご報告
- 部局との懇談会実施について
- スタッフからひとこと
- FD開催案内



信州大学 高等教育研究センター

GPA制度導入に関する現段階でのご報告

●●はじめに●●

GPA制度をどういう形で本学に導入するかについては、数年前から議論されているところです。現段階での提案は、①学生が勉強するようになるという方向で考える、②国際間で卒業生が比較される際、不当に不利な状況にならない方向で考える、③部局によって状況が異なるため、大学全体で決める部分だけでなく、部局の裁量に任せる部分も設ける、という形のものになることが予想されます。

勉強させるツールとしてのGPA



まず、①について考えます。GPAは北米の大学で広く普及しています。北米の大学では、卒業判定において、取得単位数に加え、GPAが2.0以上あることが求められます。また数学期にわたってGPAが2.0を回復できない時には退学が勧告されます。一方、国内でも多くの大学がGPAを導入して来っていますが、ほとんどの大学で、卒業要件としてGPAを用いたり退学勧告の資料にしているというわけではありません。GPAは北米の大学では勉強させるための「鞭」として機能しますが、国内の大学では、GPAに「鞭」としての機能を期待することはできないものと思われます。本学でも、一足飛びにGPAを卒業要件としたり退学勧告に結びつけたりすることには無理があると思われます。しかしそれでも、GPAは、学生の**大学生活の重要な節目節目で、超えるべき関門として何らかの形で使う**ことが望ましい、というのが①の意図するところです。

もちろん、人間は鞭があれば勉強する、というものではありません。学生が勉強するようになるよう組織をあげて取り組む必要があります。具体的には、大学・学部の『学位授与の方針』の項目ごとに、学生が「自分はそれを身に付けた」と自信を持って言うためのエビデンスとなるような課題を授業で出していく、という方向で議論が進んでいます。この仕組みに関する詳細はしばらくお待ちいただかなければなりません。勉強させるためのツールとしてのGPAは、そのような仕組みがあって初めて機能するものと思われます。

国際間競争の場でのGPA

次に、②について考えます。北米の大学では、「合格水準には達していないが、単位は与える」というDという成績区分があり、Grade Point (以下、GP)として1.0がDという成績に対して与えられます。それに対し、国内でGPAを導入しているほとんどの大学では、1.0というGPは、「合格水準に達している」という意味のCという成績区分に対して与えられます。この状況を北米から見ると、個別科目の成績において、日本人学生が取ったCという成績は、GP値においては、北米大学でのD、つまり「合格水準には達していない」という成績と同じであると見なされることになります。GPA全体

として見ても、北米の大学院に進学する場合や国際企業に就職する場合、CのGPを1.0とする大学の卒業生は、GPAにおいて最初から1.0分のハンデを背負ってしまうことになります。それを避けるため、現段階での提案では、「Dという成績を設けてそれに1.0のGPを与えるが、合格とはしない」という形になっています。

部局の裁量

最後に、③について考えます。上で説明した、「GPAをどういう目的で使うか」と「どういう成績区分に対し何点のGPを対応させるか」という2点、それに加えて、「学生が成績不良という状態に陥らないためのセーフティネット」の一環として、すでに全学で実施されている担任による定期的な面談指導、の合わせて3点が、信州大学のGPAに関する基本路線となる見込みです。それを逆側から見れば、それ以外の部分、例えば、①の最重要ポイントである「何らかの関門を設ける」について言えば、学生の4年間のどこの段階でどのような形で関門を設定するのか、に関しては、少なからぬ部分が部局の裁量に任される、ということが推測されます。

また、上では触れておりませんが、大学の全ての授業が一律にGPAの対象科目でなければならない、ということはありません。例えば5段階ではなく「合または否」の2段階で評価が出る科目はGPAの対象にはなりませんが、ある種の科目においては、それが5段階で評価されるようなものであっても、その科目の性質上、GPAにはなじまない、というものがあるかもしれません。もちろん学生と社会に対して「どうしてその科目がGPAの対象ではないのか」を説明しなければなりません。その説明をした上で、学部としてそのような科目はGPAの対象から外す、というようなことも考えられるでしょう。部局の裁量ということでは、GPAの対象科目の選択についてもその範囲内に入るものと思われます。以上のことは、もちろん教務委員会等のしかるべき組織で議論してから正式に決まることになるものです。



教員個人とGPA

一人一人の教員にとって、大学がGPAを導入することによって何がかわるのでしょうか？GPAを導入する／しないに関わらず、先生方は担当する授業科目ごとに成績を出しておられます。GPAを導入すると、その成績が自動的に・機械的にGPという数字に変換され、学生一人一人のデータ上でそれが加算されGPAが自動的に算出されます。このように、成績をGPに変換したりGPAを算出したりする作業は機械がやってくれますし、また先生方一人一人の成績の出し方がGPAの導入の有無で変わることも考えにくいので、GPA導入で先生方の負担が変わったりすることはないものと思われます。ただし、GPA導入によって学生が成績に敏感になるでしょうから、成績に関するクレームが増えてくることはあり得るでしょう。しかしながら、学生が今より成績に敏感になる、ということ自体は、『学生に勉強させる』という上記の方針にとってはとても有効ですので、罪よりも功の方が大きくなることを期待したいと思います。

学生に勉強させるための仕組み

このように、GPAの導入自体は、特に先生方に大きく影響することはないものと思われますが、GPA導入のねらいであるところの、『学生に勉強させる』の方は少なからぬ影響が予想されます。①の段落で、**大学・学部の『学位授与の方針』の項目ごとに、学生が「自分はそれを身に付けた」と自信を持って言うためのエビデンスとなるような課題を授業で出していく**

という方向で議論されていることを紹介いたしました。昨年度まであった教学専門委員会での議論です。これは今後は教務委員会において継続して議論されていくことになりましようが、根幹は、(a)「宿題を出してそれを成績に反映させることで学生を勉強させる」ということと、(b) 授業で「自分は〇〇ができるようになった」と学生が自覚し、そのエビデンスとなる課題物等をポートフォリオに順次貯めていく、という2点に集約されます。

中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』（平成24年8月28日）においては、「学位授与の方針に基づく組織的な教育への参画、貢献についての教員評価を行い、教員の教育力の向上・改善や処遇の決定、顕彰等に活用する（p.20）」とありますように、『学位授与の方針』で定める卒業時の能力・知識を学生が実際に身に付けているかどうか、を教員個人の評価に使うことが推奨されています。同じことが大学全体にも求められていることになりましよう。個人においても大学においても、『学位授与の方針』で定める能力・知識を教育成果として目に見える形にしなければなりません。上記の「大学・学部」で始まるゴシック部分は、それへの対応策として意図されているものです。まずはGPAで学生に乗り越えるべき「関門」を意識させ、同時に学生が「この授業で〇〇ができるようになった」を授業の数だけ貯めていく、という方向性についての議論に今後皆様がお自分のこととして注目していただきますことをお願いしたいと思います。近いものとしては、その方向に向けてシラバスガイドラインの改訂作業が始まります。皆様のご理解ご協力をお願いいたします。（加藤鉦三）



活動報告

部局と高等教育研究センターとの懇談会を実施しました

高等教育研究センターでは、教学関係の中期目標・中期計画の進捗状況の把握や計画遂行に向けた意見交換を主な目的として、各部局との懇談会を開催しました。今年度も右記のとおり5月中旬～6月中旬にかけて各部局を訪問しました。各部局長や教務、中期計画、評価等をご担当の先生方にご参加いただき、主に下記のテーマについて意見交換を行いました。

- *中期目標・計画について
- *信州大学の学生について
- *FDについてのご相談
- *平成24年度授業改善アンケート報告のフィードバック
- *各部局からのGPA制度（案）に対するご意見について
- *卒業生との懇談会についての御礼とお願い

今年度も昨年に引き続き懇談会形式の開催は今回の1回のみとし、今後は各事項についてご担当の先生方と直接連絡をとっていくこととしました。

★★ご対応いただいた各部局の皆様、ご協力ありがとうございました★★



平成25年度第1回懇談会実施日程

5月14日（火）	医学部
5月23日（木）	法曹法務研究科
5月28日（火）	繊維学部
5月30日（木）	農学部
5月31日（金）	理学部
6月 4日（火）	教育学部
6月 6日（木）	経済学部
6月 7日（金）	工学部
6月11日（火）	全学教育機構
6月13日（木）	人文学部

お知らせ

青年期の心理と認知の仕組みに関するFD 第1回「青年期の学習態度と知的発達」開催案内

【日時】6月20日（木）13:10～14:20

【会場】松本キャンパス旭会館3階大会議室

※教育・工・農・繊維学部各キャンパスSUNS会議室に遠隔配信

【テーマ】第1回「青年期の学習態度と知的発達」

高等教育研究センターでは、今年度、青年期の心理と認知の仕組みに関するFDを4回にわたり開催します。まず第一回目は、本センターの加藤善子准教授が、知的発達論を中心に、学生がなぜ暗記に走るのか、受け身から抜け出せないのか、それを理解するのに手助けとなる理論をご紹介します。学生の理解のしかたや知に対する態度について、ワークショップ形式で考えたいと思います。参加申込みの不要ですので、当日お気軽にご参加ください。

スタッフからひとこと

昨年度、高等教育コンソーシアム信州主催で、発達障害のある学生のための支援についての連続講演会（全4回）を開催し、延べ300人余りの方が参加されました。今年度は、高等教育研究センター主催で、広く青年期の心理と認知の仕組みに関するFDを4回開催する予定です。多くの教職員の方のご参加をお待ちしております。（学務部学務課教務グループ 細川美佳）



信州大学
SHINSHU UNIVERSITY

高等教育研究センター

■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1

■TEL: 0263-37-2194 (担当: 学務部学務課教務グループ)

■MAIL: campus-rche_info@shinshu-u.ac.jp

■URL: <http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/>

高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

Newsletter No.024

2013.12

- 信州大学の学生について(2)
- 平成26年度学内版GPIについて
- FD活動について
- スタッフから一言

信州大学 | 高等教育研究センター



信州大学の学生について(2)

本センターのNewsletter No.20においては、新入生調査(全学部1年生対象・2011年7月)、学習時間調査(全学部1年生対象・2012年7月)の結果に基づき、学生の授業外学習を促すために、課題を出すことの効果と方法について紹介しました。今回は、全学部4年生を対象とする大学生調査(2012年11月・有効回答数 1,344)の分析結果を紹介し、信州大学の学生の特徴について、考えてみたいと思います。

なお、全学及び各学部の詳しい調査の結果については、近日中にお知らせする予定です。調査の実施においては、各学部の先生方、職員の皆さまから多大なご理解とご協力をいただいたことに、センター員一同、深く御礼を申し上げます。

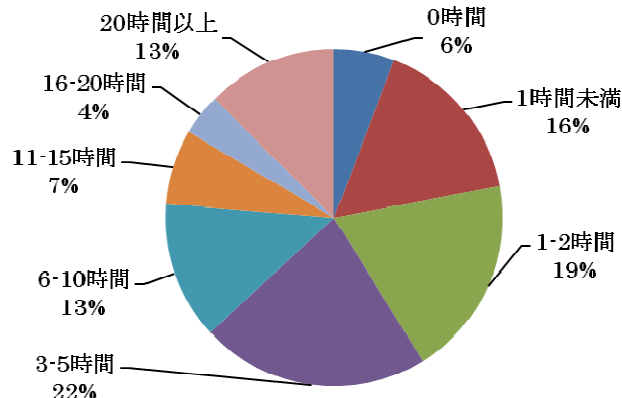


図1 授業外学習時間

信州大学に進学したのはどんな人なのか

2012年度の4年生の多くは、公立高校から進学しており(79%)、比較的学力が高い学生であると考えられます。保護者の学歴を見ると、父親の57%、母親の48%が大学や短大を卒業しています。88%の学生は自宅外通学者で、91%の学生は片道通学30分未満で大学の近辺に住んでいます。この調査に参加した他大学と比べて特徴的なのは、大学の近辺に下宿するケースが多いことです。

なぜ信州大学に進学したか

信州大学の学生は、その88%が「大学生活が充実している」と答えています。しかし、信州大学に第1志望で入学した学生は、56%に留まっており、「大学を選び直せたら、もう一度本学に進学する」と回答した学生も45%にすぎません。

信州大学に進学した理由は、「合格可能性が高かった」(79%)と「学費が適当であった」(61%)の2つで、自分の学力と親の経済状況が判断材料になっています。「一人暮らしができる」という理由も57%にのぼり、他大学を引き離しています。「本学で学ぶ内容に興味があった」学生は、59%存在するので、学生の5人に3人は、勉学に動機づけられていると言えるでしょう。

どれくらい勉強しているか

授業以外で一週間当たり6時間以上勉強する学生が37%いる一方で、1時間未満の学生も22%います。つまり勉強している学生と、それほど勉強していない学生との二極分化が進んでいます。ただし、一週間あたり20時間以上勉強する学生が13%程度いることは極めて頼もしい結果と言えます(図1)。

授業外の学習時間を分析すると、①読書時間の長い学生は授業外学習時間が長い、②大学で授業外学習時間の長い学生は、大学での成績が良い、という2つの相関がみられまし

た。高校での成績と大学での授業外学習時間には直接の相関はみられないのですが、高校での学習習慣が大学での学習態度に影響し、それが成績に反映されると考えるのが適切でしょう。

また、部活動やアルバイトなどの課外活動は、学生の授業外の学習時間を圧迫しないことが分析から明らかになりました。「部活動や同好会」の1週間当たりの参加時間が20時間を越える者の中に、授業外学習時間が20時間の学生が16%存在し、1時間未満の学生の25%は授業外学習時間が1時間にも達しません。アルバイトにも同様の傾向がみられます。適切な課外活動は、視野の拡大ややる気の向上などに積極的な効果を持っていると考えられます。

どのように勉強しているか

信州大学生の学習方法をまとめてみると、①自主的学習を友人とともにやること、②インターネットやLMSを利用して勉強すること、③教員が学生の学習に多く関わるということという3つの特徴がみられます。

84%の学生が「他の学生と一緒に勉強した」と回答しています。また、65%の学生が「授業内容について他の学生と議論した」と回答しています。つまり、自主的学習を友人とともにやっている学生がかなりの割合に達しています。

「研究、宿題のためにWeb上の情報の利用」、「インターネットを使って授業課題を受ける」と「提出」の経験を持っている学生は8割を超えています。インターネットが学習方法を大きく変えたことを如実に物語っています。

大学における授業で、「小テストやレポートが課される」と「学生自身が文献や資料を調べる」という内容の割合がそれぞれ93%と81%に達しています。学生の学習時間の確保のために、教員の努力がうかがえます。「出席することが重視される」との回答も87%あります。この特徴は全国平均と大差はありません。一方、教員が学生の学習に対して、もっ

とも多く行っているのは、「教育課程や授業に対する助言や指導」(60%)、「専門的な目標の達成の手助け」(59%)、「学習能力を向上するための手助け」(55%)です。

成績不振の学生の特徴は何か



成績が「中の下または下」の学生については、高校成績も下位である場合が多いです。また、不本意で進学した特徴がみられます。そして、授業の欠席が多く、他の学生との交流、共同学習経験も少ない特徴があります。さらに、授業外でも勉強しない傾向があります。奨学金の受給は成績不振と負の有意な関係があり、奨学金をもらった学生は学習に励む傾向があります。

学習時間と同様に、部活動、同好会の参加とアルバイト活動は学習成績にマイナス影響を与えることは確認されていません。

どのように大学生活を送っているか

生活の中で最も多く経験したのは、「ビールやワインなどアルコール飲料を飲んだ」ことです(86%)。「留学生と交流した」経験を持っている学生は31%います。注目すべきは、「ゆううつで、落ち込んだ」学生が44%いることです。その中で、13%の学生が常にゆううつを感じていると答えています。「やるべきことの多さに圧倒された」経験を持っている学生が61%います。一方、「個人的にカウンセリングを求めた」ことのある学生はわずか8%しかいません。

入学してからは、84%の学生が「他の学生との友情を深めた」、61%の学生が「大学教員と顔見知りになった」と回答しました。つまり、4年間の大学生活を通して、人的ネットワークの拡大が認識されています。ただ、4年間信州大学にいるにもかかわらず、16%の「他の学生と友情を深める」ことのできない学生と、39%の「大学教員と顔見知りになっていない」学生により注目する必要があります。



お知らせ

平成26年度学内版GPを公募します

本センターでは、学内の教育の質の向上につながる教育取組の中から、第2期中期目標・計画の遂行という観点において特に優れた取組を支援することを目的として、学内版GPの公募を行います。特に今回は、アクティブ・ラーニング(能動的学修)を促す授業方法や教育方法の取組を特別枠として採択いたします。公募要領等の書類は、本センターのウェブサイト(<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/rche/approach/campus-gp/2013/12/14751.php>)に掲載していますのでご覧ください。

※平成26年度学内版GP選考スケジュール 申請書の提出期限:平成26年1月31日(金)→書類選考→ヒアリング審査:平成26年3月17日(月)

活動報告

青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズ 第2回、3回、4回を開催しました

「青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズ」の第2回(10月30日(水))、第3回(11月12日(火))、第4回(11月29日(金))をそれぞれ開催しました。

第2回では、経済学部金早雪教授と高等教育研究センターの加藤善子准教授が講師を務め、「学生がより学ぶために、私たちができること」というテーマで、学生のやる気を高める「7つの実践(good practices)」に基づき、経済学部の新入生ゼミナールが事例として紹介されました。

第3回、4回は教育学部の島田英昭准教授が講師を務め、第3回は、「大学生の動機づけを考えるー教育心理学の観点からー」というテーマで、内発的・外発的動機づけの説明、両者の間に位置する考え方やケース、また、動機づけと目標設定との関係についても紹介されました。第4回では、「大学生の理解を考えるー教育心理学の観点からー」というテーマで、理解がどのように起こるのかが、認知心理学の知見から紹介されました。

青年期の心理と認知の仕組みに関するFDシリーズは第4回で終了となりましたが、4回を通して計146名の教職員の参加がありました。ご参加ありがとうございました。

★講演会、FDワークショップの詳細は高等教育研究センターのウェブサイトをご覧ください⇒<http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/>

スタッフからひとこと

アクティブ・ラーニング(能動的学修)は大学の教育現場で学生にとってきわめて重要であることは衆目の一致するところですが、今年度の学内版GPでは、学生の主体的な学修を促す質の高い教育を目指す取組や、授業時間外学習の確保を目指す取組をご提案いただきたいと思います。

(センター長 小池 健一)

